

目 次

スペース・イオ

はじめに

I	スペース・イオの概要	1
1	沿革と開設から現在までの経緯	
2	指導体制	
3	スペース・イオでの学習形態	
4	学習の進め方と出席認定	
II	カリキュラムフレームとプログラムについて	6
III	今年度入所児童生徒の現状と分析	10
1	入所生徒内訳	
2	入所生徒の状況と分析	
IV	学習支援の実際	16
1	学習支援プログラム	
2	集団支援プログラム	
3	IT等を活用した学習支援の実際	
V	学校・保護者との連携のあり方	27
1	学校（在籍校との連携）	
2	保護者との連携	
3	NPOとの連携	
4	関係機関との連携	
VI	成果と課題	31
1	児童生徒の改善状況	
2	高校進学後の状況	
3	平成17年度からの利用者の状況と分析	
4	今後の課題	
資料1	行事实施記録	37
資料2	視察関係一覧	
資料3・4	学習実施記録	
資料5	不登校対応アンケート集計	
資料6	アンケートから見たスペース・イオ	

スペース・イオ

「不登校児童生徒の支援の充実に向けた取り組みと課題

～スペース・イオ6年間の実践～

教頭：石黒みどり 教諭(兼)教育専門監：新目敏子

教諭：倍賞淳 教諭：土崎美香

はじめに

平成17年4月、秋田明德館高等学校通信制課程に「スペース・イオ」が設置され、小中学生の不登校児童生徒、及び中卒者に対する学習支援がスタートした。本校は、定時制・通信制を併置する単位制高校であるが、在校生の中には小中学生の時、不登校の経験を持つ生徒や、他の高校で不登校になり本校に転・編入してきた生徒も多い。

そうした生徒を受け入れる学校であるならば、むしろ早い段階でそうした生徒たちに学習支援を行うことで、スムーズに学校生活を送ることができるのではないか。そして子どもたちが「学び」の自信を取り戻し、次の自立へのステップに向かってほしいという願いのもとに、スペース・イオは発足した。

開設から5年経過し今年度は6年目にあたる。6年間の実践の中で、不登校児童生徒のステップアップに向けた様々な取り組みを行ってきた。その取り組みの成果と課題等については第IV・VI章をご参照いただきたい。

I スペース・イオの概要

1 沿革と開設から現在までの経緯

(1) 沿革

年 月	沿 革
平成13年～22年 平成12年	第五次秋田県高等学校総合整備計画 「明德館高等学校設置計画」(新しい発想での学校作りの推進～フリースクールの空間設置)
平成16年3月	学習特区の認定「IT等の活用による不登校児童生徒の学習機会拡大事業」
平成16年4月	東高校において「スペース・イオ」の準備・試行
平成17年4月	開校と同時に「スペース・イオ」開設
平成17年11月	全国展開となり「特区」の発展的解消
平成17年～19年3月	「不登校への対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業」(2年間)
平成19年～平成20年 平成20年4月	「まなび」ネットワーク拡大支援事業 横手高校定時制に「スペース・イオよこて」設置

(2)開設から現在までの経緯

平成10年2月「新しい時代に対応する高等学校の構想委員会」において、21世紀の教育課題として中高一貫教育校設置や高等学校の統廃合問題が出され、併せて不登校やひきこもりへの対策としてフリースクールの空間の設置が構想された。

それを受けて平成11年7月「第5次秋田県高等学校総合整備計画」策定委員会において、定時制の統廃合問題の中でフリースクールの空間の設置が検討され、平成12年7月の成案の中に盛り込まれた。

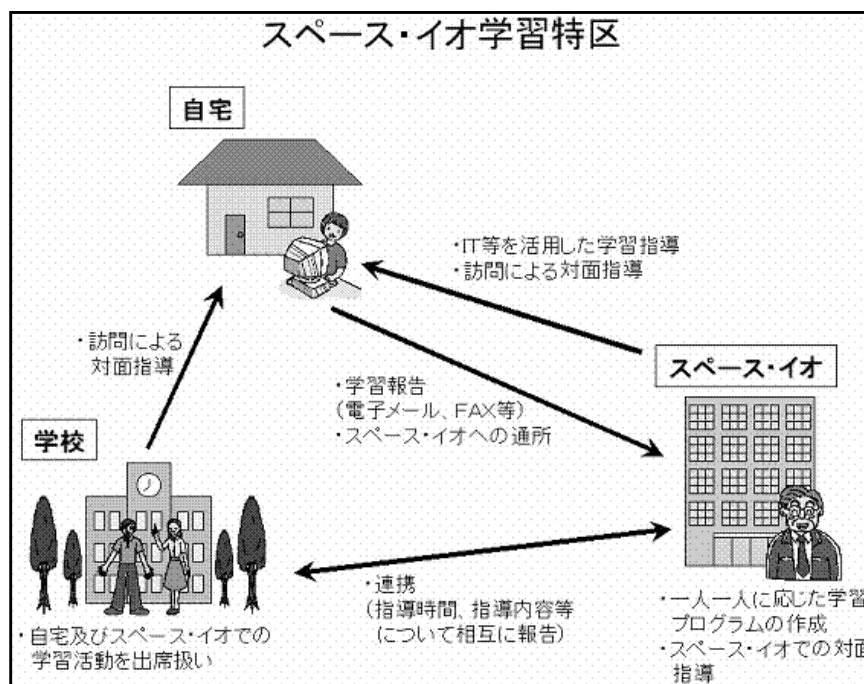
平成12年「明德館高等学校設置計画」が策定される際、開設場所として秋田県教育・福祉複合施設「明德館ビル」に設置されることとなり、平成16年4月より秋田東高等学校通信制課程において開設のための準備・試行がなされ、10名の児童生徒が指導を受けた。この準備期間を経て、平成17年4月、「スペース・イオ」が開設された。

学習支援は、スペース・イオでの学習や自宅での学習に対して行われる。例えば、スペース・イオでの時間割に沿って学習をしたり、自宅でインターネットを使って学習をしたり、通信添削を行ったり様々な方法で学習に取り組むことができる。施設の中には、共通スペースや個人学習ブース、相談室などが設置され、子どもたちや保護者が気軽に活用できるような配慮がされている。

(3) 学習特区「IT等の活用による不登校児童生徒の学習機会拡大事業」

平成16年3月、本県は構造改革特別区域として認定を受けた。これはスペース・イオで学習を進める小・中学生について、IT等を活用して自宅で学習した場合であっても、その学習状況に応じて在籍している学校の校長が出席等の認定を行うことができるというものである。「学習をした」ということを、しっかりと認めて、子ども自身が前へ進むことを評価するために、次の図に示す3つの連携を図り、子どもの学習を支援するのである。

なお、本事業の成果が認められ全国展開が可能になったことで、平成17年11月学習特区の認定は発展的に解消した。



(4) NPO等との連携事業「不登校への対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業」

(平成17年4月1日～平成19年3月31日)

平成17年4月、上記研究テーマで文部科学省の実践研究事業としての認定を受けた2年にわたる調査研究であり、不登校の子どもたちのステップアップ・プログラムを策定すべく研究を進めた。

研究内容としては

- ① 不登校児童生徒の実態に応じた効果的な学習カリキュラムの開発と実施
 - ② NPO等との合同活動の在り方-連携活動プログラムの開発と実施
- について、実践を進めながら研究に取り組んだ。

(5) 「まなび」ネットワーク拡大支援事業

平成19年4月から、上記事業が始まった。1年後の「スペース・イオよこて」発足や近い将来県北地区への同様施設の設置に向けての支援と、適応指導教室・小中学校等へのスペース・イオの成果の普及を内容としている。これを主として担うため、「まなび」ネットワークアドバイザーが置かれ、20年度まで継続して活動した。

(6) スペース・イオの基本構想

スペース・イオの取り組みは、この二つの事業を柱として、学習支援を通して不登校の児童生徒が自分の目標に向けてステップアップしていく支援システムと学習プログラムを策定し、本県の不登校児童生徒数の縮減を図るとともに各学校の学習支援のあり方の参考に資することが目的である。

そのために、次の項目について重点的に実践研究を行い有効な支援プログラムの策定をめざした。

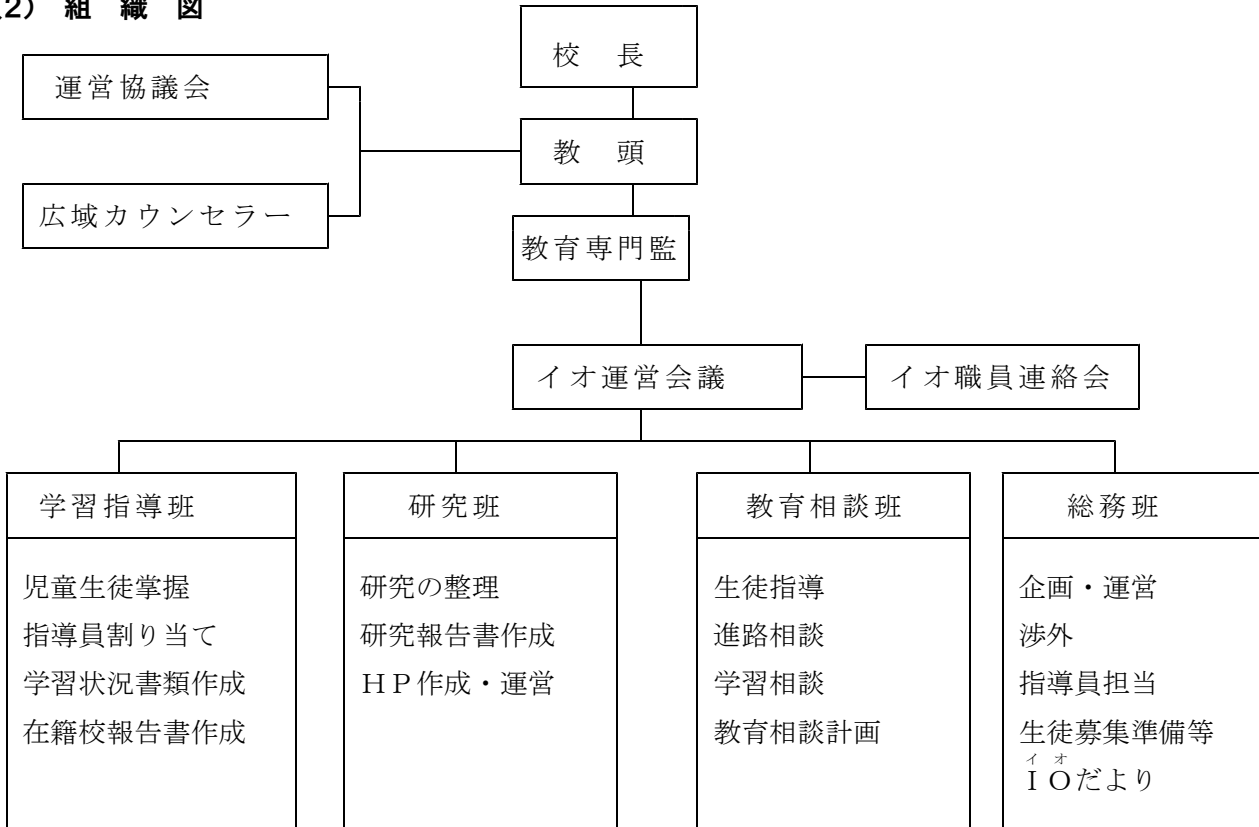
- ① 学校復帰等に向けた学習支援体制の確立
- ② 学校との連携システムの確立
- ③ 児童生徒一人ひとりのつまずきや学力レベルに応じた個別カリキュラムの作成
- ④ IT等による学習支援プログラムの策定

2 指導体制

(1) 職員

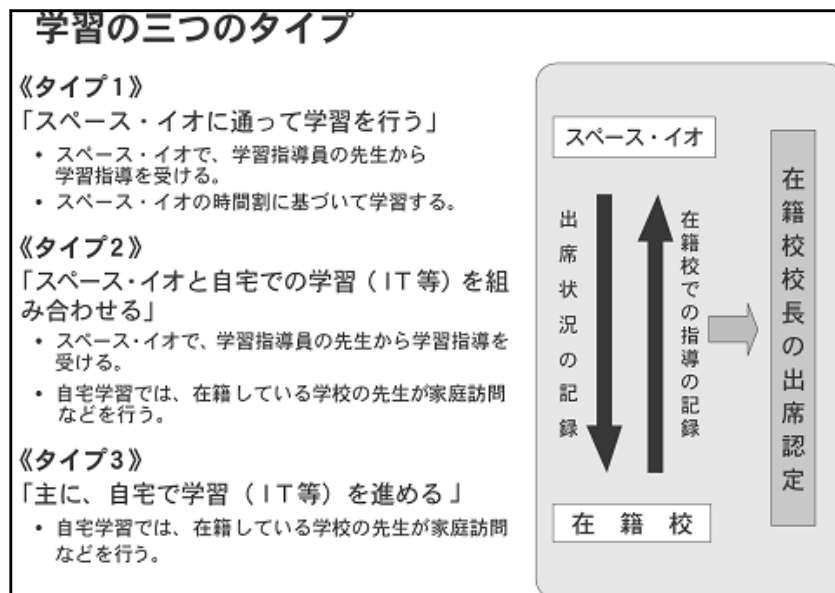
	職 務 内 容	人 数
教 頭	スペース・イオの服務監督（通信制課程教頭を兼務）	1
教育専門監 （主任）	スペース・イオ全体の統括及び生徒管理、生徒への指導、生徒在籍校への指導、主担当教員	1
教 諭 （副 主 任）	主任職務の補佐 スペース・イオの生徒管理及び個別指導、小集団指導、主担当教員	1
教 諭	スペース・イオの生徒管理及び個別指導、小集団指導、主担	1
学習指導員	スペース・イオの生徒に対する学習指導、小集団指導、副担 当教員	5
IT学習指導員	IT等教材の開発とIT等学習の担当	2
学習指導 カウンセラー	スペース・イオの生徒に対する学習指導とカウンセリング	1

(2) 組織図



3 スペース・イオでの学習形態

スペース・イオでの学習は次の3つのタイプで行われる。



4 学習のすすめ方と出席認定

スペース・イオの子どもたちは次のような手順を経て学習を進め、それが在籍校校長により出席と認定される。

(1) 本人の希望確認

「学習計画等に関するアンケート」用紙への記入とともに、学習のタイプや学習したい教科、通所のペース、学習の方法、通信方法などについての希望を確認する。

(2) 担当との相談と学習計画

【タイプ1、2の場合】

主担当教員と相談しながら、通所の曜日や時間帯、取り組みたい教科や学習内容を決めて「学習計画書」を作成する。

【タイプ2、3の場合】

面談やメール等で主担当教員やIT等学習指導員と連絡を取り合い、「学習計画等に関するアンケート」に基づいたより詳しい学習内容を確認し合う。

(3) 本人のペースに応じた学習

【タイプ1、2の場合】 毎週作成の「学習計画書」に基づき学習を進める。

【タイプ2、3の場合】 IT等学習指導員からの問題に解答して、返信する。採点結果や解説メールで学習を進める。

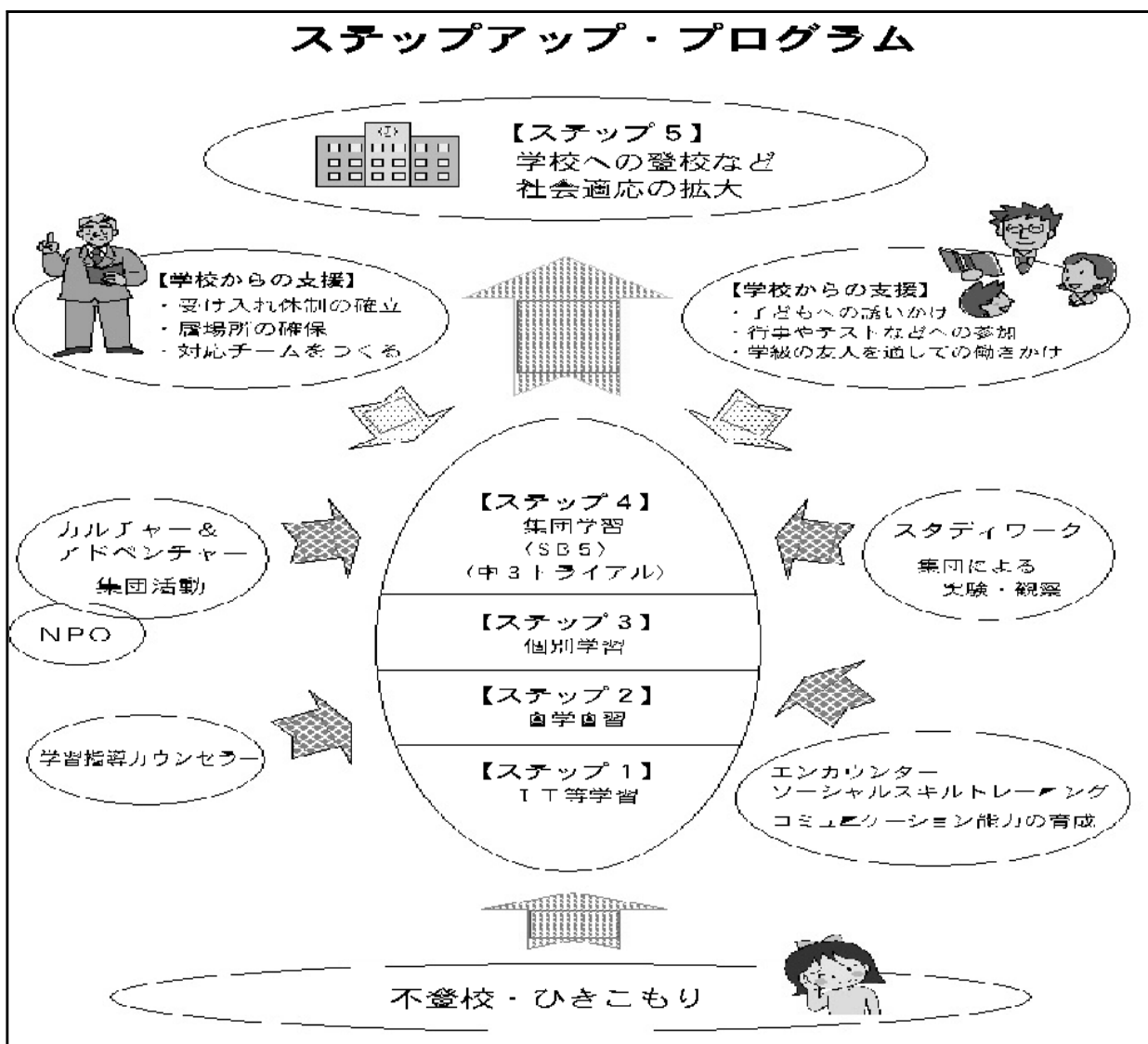
(4) 学校への報告と出席認定

在籍校に毎月の出席日数やIT等学習の回数、学習状況、スペース・イオでの様子を報告する。この報告にもとづいて在籍校校長は出席認定をする。IT等を活用した学習では、出席扱いの要件を満たした場合に、在籍校校長は課題の送信とそれへの返信の往復を1回（出席日数1日）としてカウントできる。

Ⅱ ステップアップ・プログラムとカリキュラムフレーム

1 5段階のステップによる学習支援

スペース・イオでは、学習支援や人間関係能力、集団適応能力の育成により子どもたちが成長し、自分の目標に向かって一步一步ステップアップしていくことをめざしている。子どもの学習状況を5つのステップに分け、段階的に達成することで各自のめざす目標に近づいていくのである。ステップは必ずしも順番に通過するものではなく、子どもによっては前後したり飛び越えたりすることはよくあることであり、柔軟な対応が必要である。



【ステップ1-IT等学習】

ひきこもり傾向の強い児童生徒に対しては、IT等を活用した学習から始める。メール等によりコミュニケーションを広げていく。

【ステップ2-自学自習】

無理のない時間、ペースでの自学自習からスタートさせる。主担当教員とともに学習のつまずきを

振り返り、学習計画を作成し、学習に対するレディネスをつける。

【ステップ3-個別学習】

不登校のその期間や状態により学力に差が大きく、個別の学習指導が必要である。学習指導員が寄り添い、自信を回復させつつ、学習の仕方も教える。

【ステップ4-集団学習】

個別学習を通して力をつけてきた子どもを対象に、集団での学習を実施する。学校復帰に向けて一斉授業に慣れさせるとともに、学び合いの学習効果を図る。

【ステップ5-学校への復帰、進路決定など集団適応の拡大】

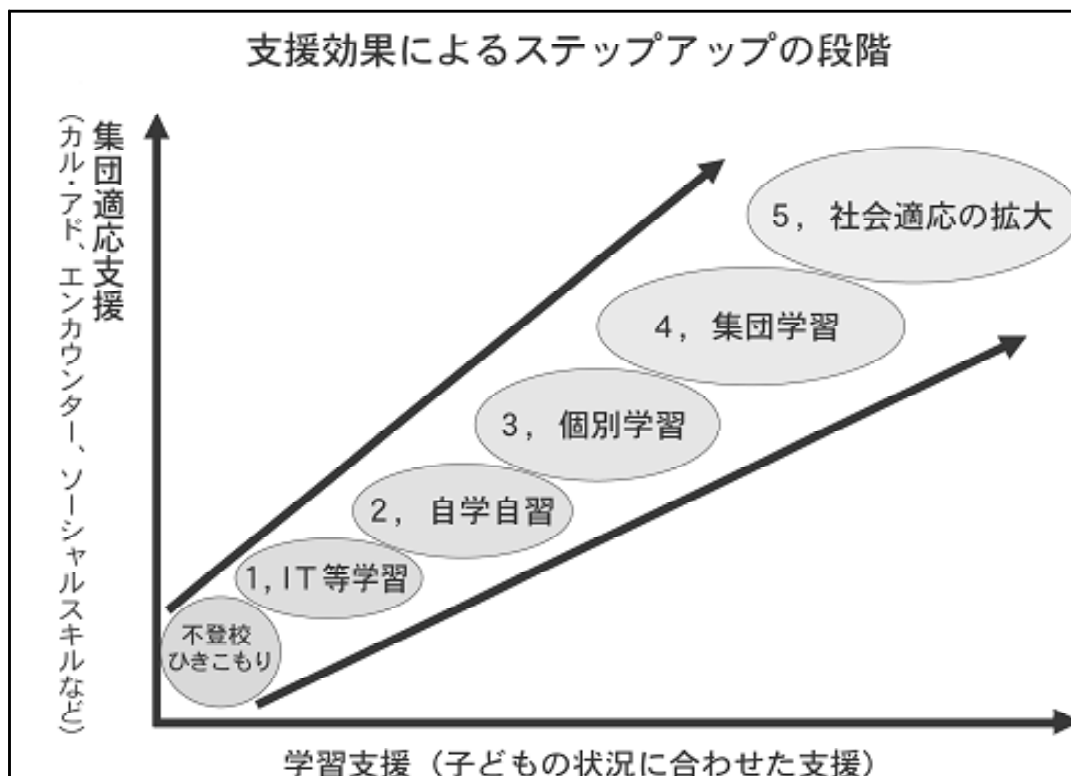
集団学習が可能となった子どもには、積極的に学校への登校や進路決定などを励まし、集団適応できるようにする。学校復帰は関係者の連携を図り、部分登校から挑戦させる。

2 人間関係能力、集団適応能力の育成

ステップアップに向けては、子どもの人間関係能力や集団適応能力を育てていくことも重要な課題である。そこで、「カルチャー&アドベンチャー」「スタディワーク」「エンカウンター」「ソーシャルスキルトレーニング」などをカリキュラムに加え、子どもが集団に適応していくスキルの育成を図る。

3 支援効果によるステップアップの段階

スペース・イオでの支援は、IT等学習から集団学習までの子どもの状況に合わせた学習支援とエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等による集団適応支援の二つが大きな柱である。両方の支援がかみ合うことによって、子どもたちはステップ1から5まで段階的にステップアップが進み、学校への登校等社会適応の拡大へとつながる。



4 カリキュラムフレームと支援プログラム

児童生徒は自分の取り組みたい学習活動や曜日、時間帯を主担当と相談しながら決め、学習計画を作成し、各自のペースで学習に取り組む。

(1) カリキュラムフレーム(時間割)

	月	火	水	木	金	日
I 9:50~10:30	読書	読書	読書	読書	読書	月2回程度 実施 ・秋田明徳 館高校通信 制スクーリング日 に開所 ・自学自習 が中心 ・生徒・保護 者の相談対 応(学習・生 活等)
	スキルアップ	スキルアップ	スキルアップ	スキルアップ	スキルアップ	
	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	
	個別学習*1	個別学習*1	個別学習*1	個別学習*1	個別学習*1	
II 10:45~11:30	S B 5 国語	S B 5 英語	S B 5 社会	S B 5 数学	S B 5 理科	自学自習 個別学習
	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	
	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	
III 11:45~12:30	S B 5 理科	S B 5 数学	S B 5 国語	S B 5 英語	S B 5 社会	個別学習 連絡タイム
	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	
	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	
	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	
連絡タイム				相談タイム		
昼食・休憩						
IV 13:15~14:00	自学自習	スタディワーク (理科・社会)	音楽リラクゼーション	ソーシャルスキルトレーニング ・エンカウンター(隔週)	カルチャー&アドベンチャー	個別学習 相談タイム
	個別学習	自学自習	自学自習	自学自習	自学自習	
	相談タイム	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	
V 14:10~15:00	中3トライアル 相談タイム*3			中3トライアル 相談タイム*3		

*1 個別学習希望の増加により後期(10月)から開始。

*2 月2回程度の日曜日は、主にIT等学習を行っていて希望する者の通所指導を行う。

*3 進学、進級時の相談希望増加に対応するため、1月から相談タイムを増やす。

学びなおし講座(科目履修講座)

	A	B	C
10:45~11:30	基礎演習	社会	理科
11:45~12:30	理科	基礎演習	社会
13:15~14:00	数学	英語	国語
14:15~15:00	英語	国語	数学

(2) 支援プログラム

① 自学自習

学習習慣の確立と自分で学習する力を身につける。

② 個別指導による学習支援

個別の学習支援により、学習に対する自信を回復させるとともに、学習の仕方を教える。

③ 集団での学習を通じた学習支援

- ・ **スタディワーク**：中学校の理科や社会の基礎的な実験、観察、体験などを通して知的好奇心を深める。
 - ・ **SB5（スタディベーシック5）**：中学校1～2年生程度の5教科（英、数、国、理、社）の基本的な内容を授業形式で行う。基礎学力の充実と一斉授業になれることを目的とする。
 - ・ **中3トライアル**：英、数、国の3教科について進路実現に向けた準備的学習を授業形式で行い、基礎学力の伸長と意欲や自覚を高める。
- ④ 体験的活動による学習支援
- ・ **カルチャー&アドベンチャー**：軽スポーツや調理などの集団活動を通して体験を広げ、コミュニケーション能力や課題解決能力を育む。NPO法人「不登校を考える親の会あきた」とも連携して企画、実施する。
- ⑤ 対人関係能力・集団適応能力の育成
- ・ **エンカウンター**：エクササイズを通して心のふれあいを図り、自己肯定感を高める。
 - ・ **ソーシャルスキルトレーニング**：小集団の活動や作業課題を通して自分の気持ちを伝えたり、相手の話を聞くスキルを身につける。
- ⑥ 自己目標の達成と内面世界の拡大
- ・ **スキルアップ**：漢字検定、英語検定、歴史検定等の資格試験に挑戦する。
 - ・ **読書**：学校図書館等を利用して、読書に取り組み、内面世界を広げる。
 - ・ **音楽リラクゼーション**：歌唱、音楽鑑賞、楽器の演奏等を通して、情緒の安定を図る。
- ⑦ IT等を活用した学習
- ひきこもり傾向の強い生徒や遠方の生徒を対象としたインターネットメールやファックス等を使った学習支援で、学習意欲を高め、対面指導につながるよう援助する。
- ⑧ 相談タイム
- 学習指導カウンセラーが、児童生徒の悩みや相談にのり、問題を整理して解決に向けて踏み出していくことを支援する。



教室の様子

Ⅲ 今年度入所児童生徒の現状と分析

1 入所児童生徒内訳

本年度前期入所は39名（継続24名・新規15名）、後期入所は17名、その後の体験入所13名、退所1名となっている。データは2月8日現在の利用者数69人で作成した。

(1) 学年・男女別

	学 年				合計（人）
	中1	中2	中3	中卒生	
男	1	9	19	2	31
女	8	8	21	2	39
計（人）	9	17	40	4	70

- ① 中学生の割合が94%を占める。
 - ② 56%が女子である。
 - ③ 学年別では中3年生の割合が最も高く57%を占める。
- ※ 平成21年度との比較では、男女数の差が縮んでいる。

(2) タイプ別

タイプ別	中学生	中卒者	計(人)	形 態
タイプ1	37	1	38	通所のみ
タイプ2	9	0	9	通所+IT等学習
タイプ3	20	3	23	IT等学習のみ
計（人）	66	4	70	

- ① タイプ別の割合は、タイプ1が54%、タイプ2が13%、タイプ3が33%である。
 - ② IT等学習を活用している割合は全体の48%である。
- ※ 平成21年度との比較ではタイプ3が5%ふえた。

(3) 地域別

	県 北		中 央		県 南		計	
	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数
中 学 生	2		63		1		66	
中 卒 生	0	2	4	25	0	1	4	
計	2	2	67	25	1	1	70	28

- ① 地区別の生徒数の割合は、中央が94%をしめる。
 - ② 地区別の学校数の割合は、中央89%となる。
- ※ 平成21年度との比較で、県南・県北のポイントが下がった。

(4) 入所児童生徒の推移

	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数
小学校	4	4	5	5	6	5	5	5	0	0	0	0
中学校	51		63		82		83		73		66	
中卒者	3	31	11	33	6	34	7	34	8	30	4	28
計	58	35	79	38	94	39	95	39	81	30	70	28

2 入所児童生徒の状況と分析

以下はスペース・イオの入所児童生徒の状況について、分析を試みたものである。

(1) 不登校のきっかけ

次の表は不登校のきっかけ等について入所時の面接や在籍校からの資料をもとにまとめた。

き っ か け	中 学 生	中 卒 生	計 (人)
い じ め	8	0	8
友人関係・関係作り	15	2	17
学 力 等	1	1	2
病 気 等	9	0	9
発 達 障 害 等	0	0	0
そ の 他	26	0	26
不 明	7	1	8
計 (人)	65	4	70

- ① 「いじめ」や「友人関係」などによるものが36%を占めている。
 - ② 「学力や学習の遅れ」が3%、「病気等」が13%となっている。
 - ③ 「その他」は37%で、「なじめない」「学校と合わない」「集団が苦手」等がある。
 - ④ 診断名はついていないが、受診し発達障害等の傾向にあるといわれた生徒が5名いる。
- ※ 平成21年度との比較では、「学力や学習の遅れ」が8%「病気等」が10ポイント下がっている。

(2) 不登校の期間

次の表は、スペース・イオに在籍する児童生徒の不登校の期間をまとめたものである。

期間\学年 (年以上～年未満)	中 学 生			中 卒 者	計(人)
	1	2	3		
0～1	9	11	16	1	37
1～2	0	4	14	0	18
2～3	0	1	3	1	5
3～4	0	0	4	0	4
4～5	0	1	3	1	5
5～6	0	0	0	1	1
6～7	0	0	0	0	0
計(人)	8	17	40	4	70

- ① 不登校期間が1年未満の生徒の割合が高く53%を占める。
 - ② 不登校期間が3年以上の長期にわたる生徒の割合は14%である。
- ※ 平成21年度比で3年以上の生徒は3ポイント増えた。

(3) 年間延べ通所人数(2月末現在)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
延べ人数	137	209	290	192	141	274	352	387	297	292	374	122	3067
1日平均	7	11	13	11	9	14	18	19	23	19	19	20	15

- ① 4月・5月に通所した生徒は、平成21年度からの継続と新規の一部である。
- ② 後期の入所申請生徒の体験学習は6月中旬から開始している。

3 「こころとからだの健康調査」(2010年9月実施)より

(1) 調査の概要

「こころとからだの健康調査」は、学習指導カウンセラーがスペース・イオに通所する生徒を対象に行った。生徒の心身の状態を見立て、指導や対応の役立てることを目的とした。調査はアンケートと個別面談からなり、アンケートをもとに生徒のストレス状況を客観的に把握し、個別面談でより詳細な情報収集を行った。

(2) 調査手続き

今年度は2010年の9月に調査を実施した。通所してきている生徒に対しては手渡しで行い、主にIT学習を活用しているタイプ2・3の生徒にはITを利用してアンケートを行った。アンケートには「中学生用ストレス反応尺度」(嶋田洋徳「小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究」1998年)を使用した。これは、4つのストレス反応(①不機嫌・怒り感情, ②抑うつ・不安感情, ③身体的反応, ④無気力)の表出の程度を調べるものである。得点が高ければ高いほど、ストレス反応が強く出ていることを示している。そのほか、起床・就寝時間や家庭での過ごし方などの生活の様子についてもアンケートに加えた。アンケート実施の際は、生徒に調査は強制ではないことをあらかじめ伝え、無記入での返却や個別面談の拒否も可能であることを補足した。アンケート配布部数は45部、回収アンケート部数は29部で、回収率は64%であった。個別面談を希望した生徒は21名であった。タイプ別の回収数、面談希望数を以下の表に示す。

	タイプ1	タイプ2	タイプ3	合計
配布数	22	6	17	45
回収数 (%)	20 (91%)	3 (50%)	6 (35%)	29 (64%)
面接希望数 (%)	16 (73%)	1 (17%)	4 (24%)	21 (47%)

(3) 調査結果

2008年、2009年の調査結果と、一般の中学生を対象とした先行研究の結果を比較した。中1男子・女子については、生徒数が少なく有効な回答が一定数得られなかったため中2男女と中3男女について比較することとする。

中2男子は、年やストレス反応によってばらつきがみられる。しかし、一般的な中学生よりも高いストレス反応得点を示したのは2009年の抑うつ・不安感情、2008年の身体的反応のみで、それ以外ではイオの生徒のほうが得点が低いという結果になった。

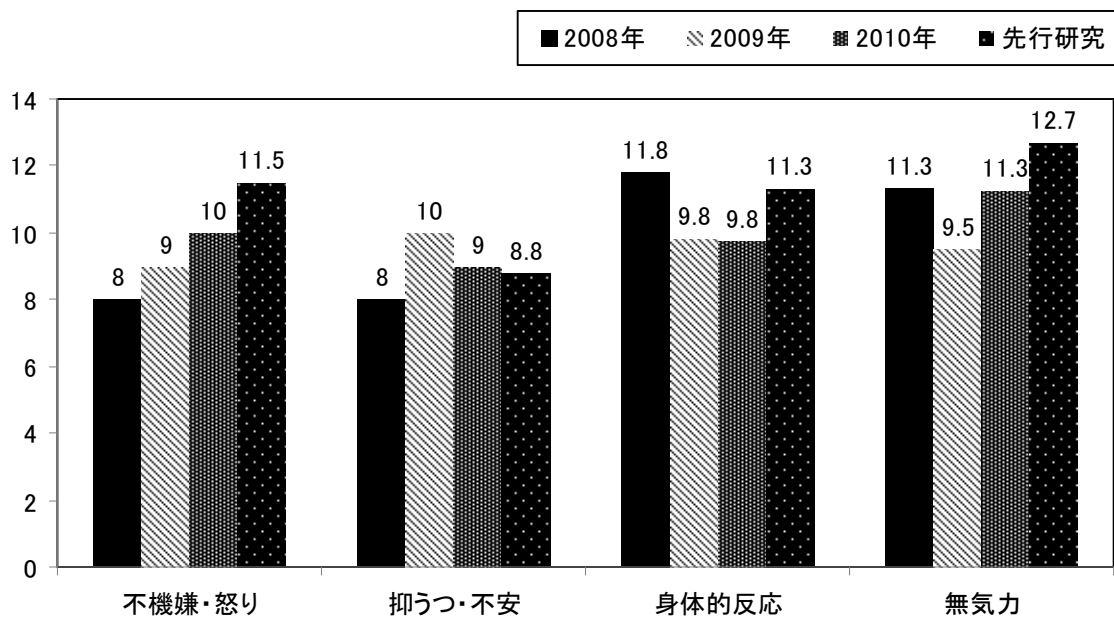
中3男子は2008年、2009年の調査結果では一般的な中学生よりもストレス反応得点が低いものが多く、中2男子と同様の傾向が示されたといえる。しかし、2010年は一般的な中学生や2008年、2009年の得点を上回っていたものが多かった。

中2女子ではイオの生徒のほうがストレス反応得点が高いものが多かった。特に2010年ではすべ

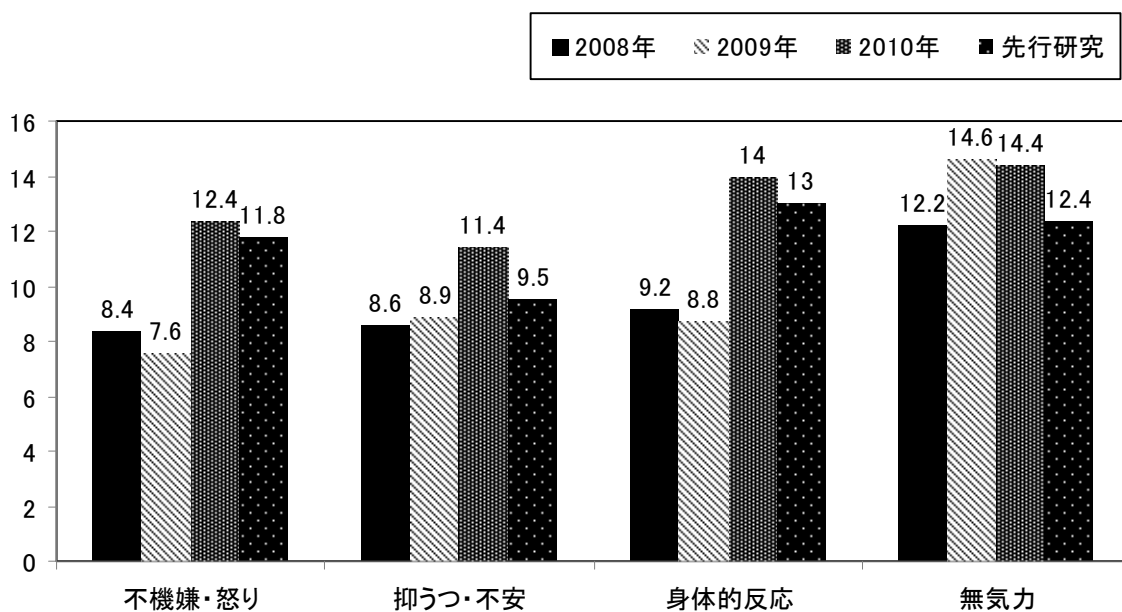
でのストレス反応において一般の中学生よりもイオの生徒のほうが得点が高いという結果が示された。2008年、2009年と比較しても2010年のストレス反応得点が全体的に高くなっている。また、2010年の中2女子のストレス反応得点は同年の中3女子よりも高かった。

中3女子では2008年の得点がいずれのストレス反応においても最も高かった。2009年、2010年は不機嫌・怒り感情と抑うつ・不安感情が一般的な中学生よりも得点が高かった一方で、身体的反応と無気力ではイオの生徒のほうが得点が高いという結果になった。

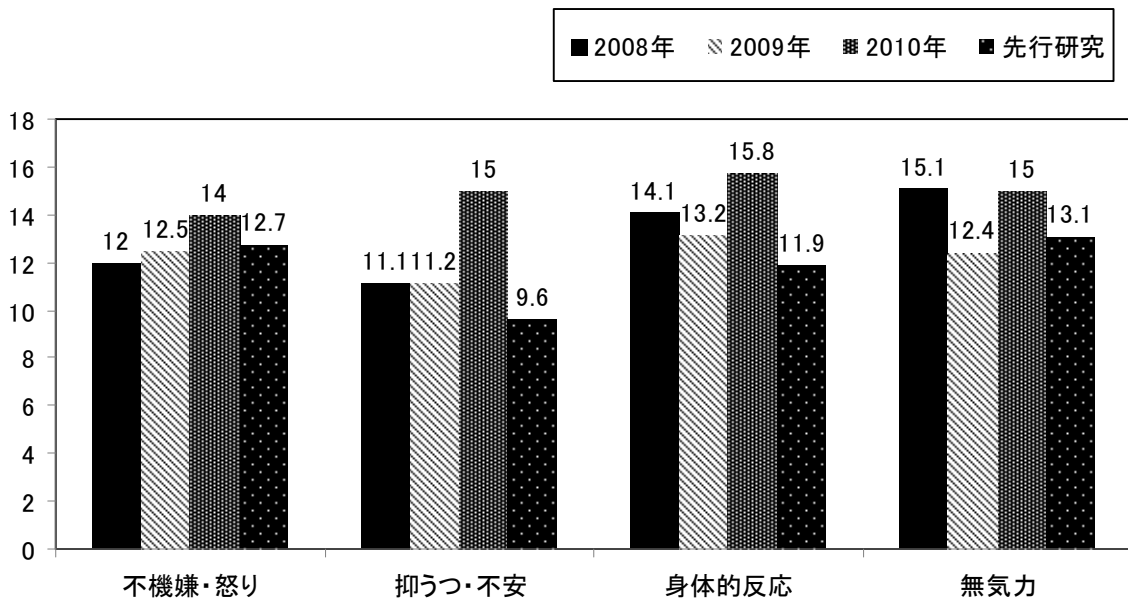
中2男子



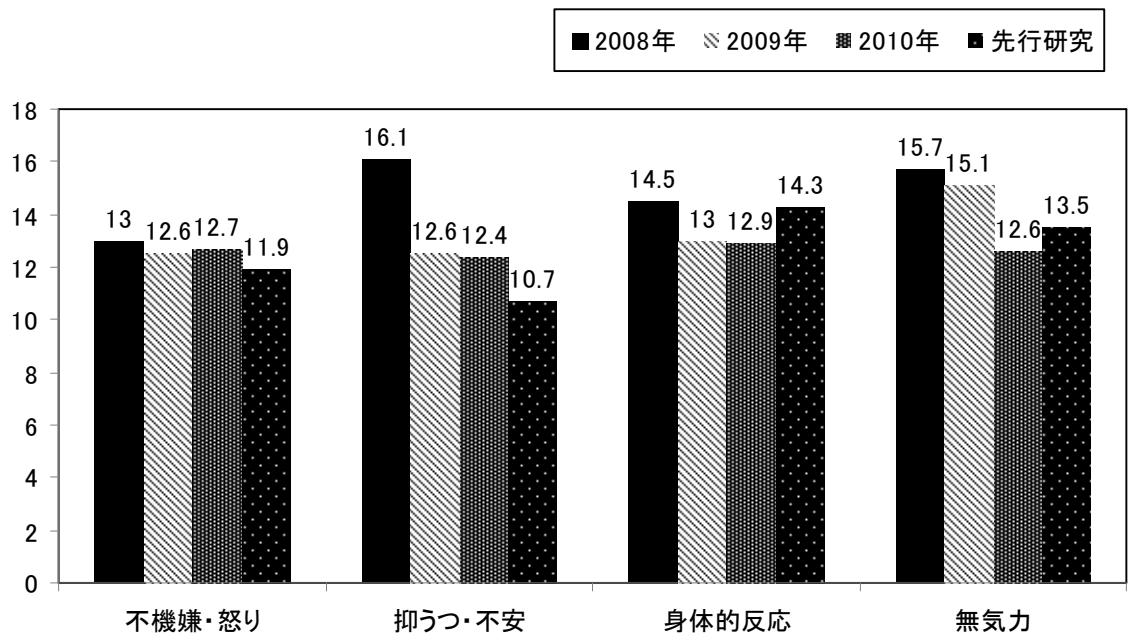
中3男子



中2女子



中3女子



(4) スペース・イオの生徒の特徴

<イオの男子生徒のストレス反応の特徴>

イオの男子生徒のストレス反応の特徴としては、①全体としてみると一般的な中学生よりもそれほどストレスを感じていないものの、②2010年の中3男子のみ一般的な中学生よりもストレス反応を強く感じていることが示された。以上の結果について、個別面談で得られた情報や普段の生徒の様子から推測した。

①に関して、個別面談で語られた内容からストレスをそれほど感じていない理由として、ストレスに対して自分なりに対処できていることが考えられる。具体的には、本屋などに出かけたり、パソコンで好きな動画を見たり、ゲームをしたりして気分転換している生徒が多くみられた。また、目の前にストレス源があっても、それとうまく距離をとり自分がストレスを感じなくてもすむような対処方法を身につけている生徒もみられた。

②については、ストレス源があってもうまく対処できずストレスを溜め込んでいることが考えられる。具体的な内容としては、勉強をしなければならないのはわかっているが何から手をつけていいのかわからない、家族と折り合いが悪いがどうすることもできないといったことが語られた。また、相談タイムの利用状況から見ても男子の利用は女子に比べて非常に少ない。これらの状況はストレスを強く感じているにも関わらず、気分転換したり周囲のサポートを受けたりするといったストレス対処の手段を活用できていないのではないかと考えられる。こういった生徒に対して、今後ストレス対処の方法を紹介するといった心理教育的な関わりや相談タイムを利用を促すことなどを行っていく必要があると思われる。

<イオの女子生徒のストレス反応の特徴>

2010年の中2女子のストレス反応が一般的な中学生、2008年・2009年、同年2010年の中3女子よりも高かった。このことについて個別面談で語られた内容や普段の生徒の様子から考察した。

イオの女子生徒には、解決が難しい問題やもやもやとした気持ちを抱えている生徒が多かった。特に中2女子においては、そういった悩みをうまく表現できずストレスを処理できない状況にあるのではないかと考えられる。相談タイムを継続的に利用している生徒もいるが、悩みや不安をいつも抱えながら生活している様子がみられた。今後は、SSTなどを活用し自己表現の場を設けたり、相談タイムで生徒の気持ちを傾聴したり受容的に関わっていくことが必要であると考えられる。

<参考文献>

嶋田洋徳 「小中学生の心理的ストレスと学校不適應に関する研究」 風間書房、1998、p88

IV 学習支援の実際

1 学習支援プログラム

(1) 自学自習

新しい学習環境への適応や、学習習慣の確立、一人で学習を進める力の育成を目的に行った。自学自習の場合も、学習指導員等が机間指導をして質問等に対応した。自学自習した内容は個人ファイルに記録し、進捗状況を把握した。記録は出席状況として一ヶ月ごとに在籍校へ報告した。下表は任意の一週間の自学自習時間をまとめたものである。

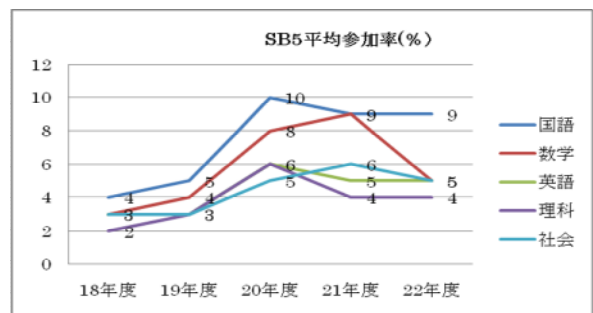
期 間	自学自習のべ人数	1時間あたりの人数	主な学習内容
6/14～6/18	88	4.4	持参問題集、新出単語、基本構文、漢字等の書き取りや意味調べ等
11/29～12/3	120	6	

(2) 個別学習

生徒の希望に寄り添いながら、個別指導を行った。入所児童生徒の増加と、個別学習の希望の増加に応えるため、後期から個別学習の時間を組み入れ、週当たり8時間増やした。個別ファイルに記録された学習内容から、進捗を確認し、さらに生徒に確認し、学習の継続に生かしている。記録は出席状況として一ヶ月ごとに在籍校へ報告した。

(3) SB5 (スタディベーシック5)

毎週2、3時間目に当たる時間に、秋田明德館高等学校の小教室を利用して、少人数の授業形式で実施した。高校生の受けている授業の気配を感じながら、学校により近い雰囲気での学習をすすめることができるため、ステップアップへ向けて、効果的な刺激の一つであると考えた。



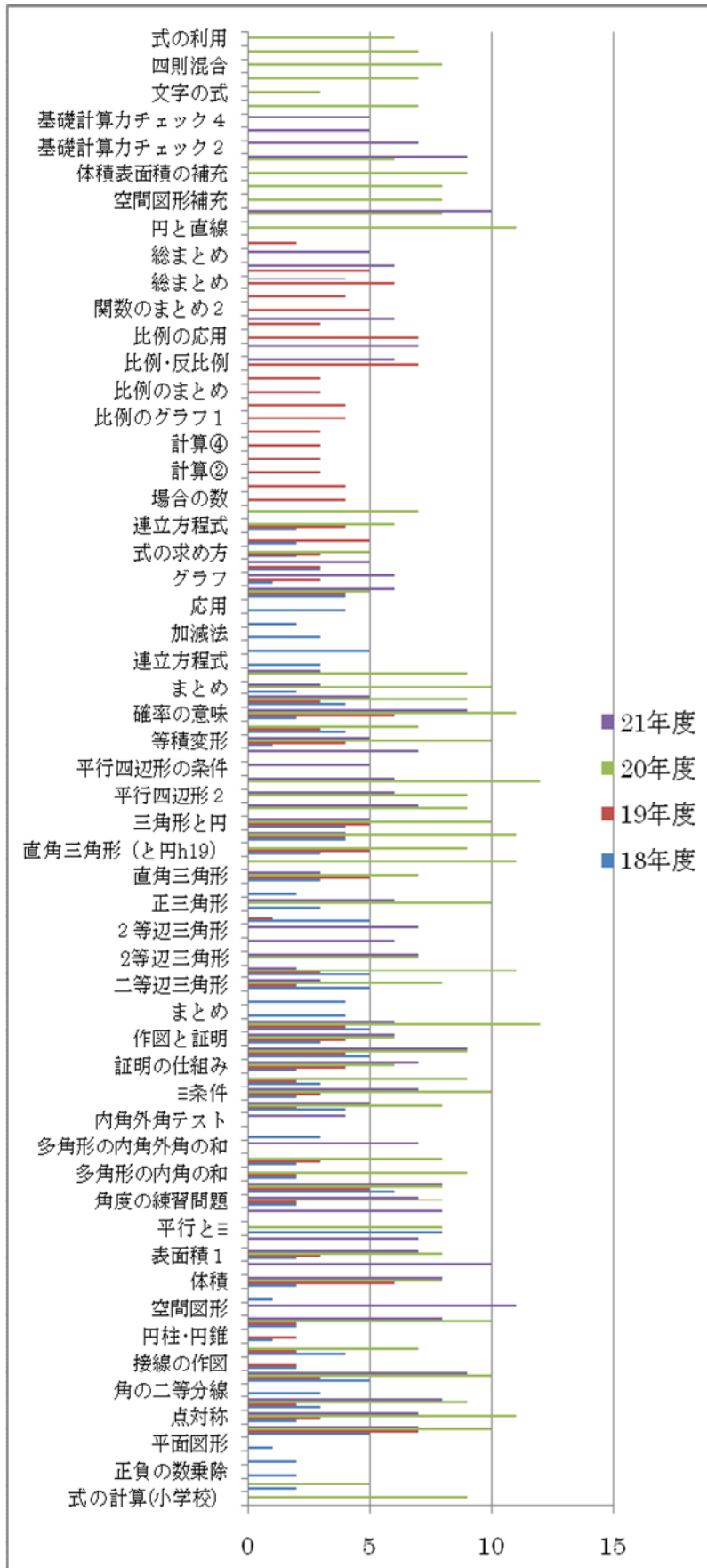
右上は平均参加率の推移である（平成18年度～平成22年度）。教科の特性上、集団学習への参加の一歩として、国語の授業への参加を選択する児童生徒が多く、参加率が高いのではないかと推察される。

次表は、各教科の実施状況と課題をまとめたものである。

教科	① 題材や単元学習内容や進め方等 ②実施状況 ③成果等
国語	<p>①教科の基本的内容を、授業形式に慣れることも目指しながら、主に1、2年の学習内容を中心に全50数回に渡り単元を組んだ。毎回出席し学習を継続できる生徒だけでなく、興味や意欲に応じて一回の授業に参加しても到達目標が達成可能なものとし、また、習熟度が異なる生徒に対応し得る内容になるように心がけた。</p> <p>②平均出席生徒数は、6.2人程度であった。生徒各人に持たせる記録用紙にはシラバスの役割も期待し「単元・題材名」と「学習のねらい」を二ヶ月毎まとめて示した。生徒はそれによって学習内容の確認及び自己評価ができていたように思う。</p> <p>③人との距離感を掴むのが苦手な生徒が多い中、他と関わりや自分を伝えあうための国語の学習支援の重要性を感じる。また成長過程の自分を見つめるに当たって国語の担う役割は大きい。さらに、多様な生徒に対応し、それぞれの生徒にとって魅力ある授業、学習支援となり得る授業はどうあればよいか模索している。</p>
社会	①主に1、2年生で学習する地理、歴史を中心に実施したが、タイムリーに時

	<p>事問題を取り上げ、ニュースに関心を持ったり、自分なりに解釈したりできるように配慮した。</p> <p>②授業の冒頭5分間くらい、「地図帳から学ぶ」として、都道府県の県庁所在地や人口、世界の国々の国旗などを地図帳から探して確認する時間を設けた。また、生徒同士で問題を出し合い、地球儀から国を探し当てたり、地図帳で正確な国名を確認したりした。歴史では、年表や写真資料を用意して、ビジュアル的に関心を持って、その時代・人物・文化に対して具体的なイメージや興味関心を持つことができるようにした。地理・歴史とも1時間ごとにプリントを用意して、要点を書き込むことで学習の定着を図った。</p> <p>③生徒一人一人が、「なぜ」「どうして」という問題意識を持って学習に臨むようにしていきたい。そのために、これからも題材や教材の精選、学習内容の提示方法などを工夫していきたいと思っている。</p>
数学	<p>①計算領域は自学や個別学習、ドリル学習により個に応じた習得することができる。それに対して図形領域は個人差にそれほど左右されることなく取り組むことができることから1・2年の図形領域を中心に具体物や操作を重視して学習した。その外に「確率」の学習、総復習として1・2年の「数と計算」、「数量関係」の内容を6時間ずつ組み入れた。</p> <p>②平均生徒数3.4人。生徒数は少ないが、個人差が大きく内容により基本、練習、発展問題と準備して対応した。毎回出席する生徒もいるが、体調に合わせて出席したり、3年生では自分に必要な内容の場合のみ出席し効果的に利用した生徒もいた。黒板で自分の考えを発表することで自信をもったり、人の考えを聞くことで思考を深めたりすることもできた。また新しい中間とも次第に教え合うようになり、学習内容を身につけるだけでなく中間との関係をつくることもできた。</p> <p>③毎回出席しているとそれなりに積み重ねができていくが、体調や教科への苦手意識のため継続できない生徒に対し、既習内容の復習からの授業となることが多く、計画した内容を進めることができないことが多い。しかし、授業に参加するだけでも大きな前進である生徒もおり、出席したことを認めてやるのが大事であると思う。積み重ねの教科であり内容を定着させることが達成感を味わい、次への意欲につながることからその兼ね合いが悩むところである。また数学は楽しい、わかると思えるような課題設定や指導の工夫が足りなかった。</p>
理科	<p>①教科書に出てくる重要単語が読めて、その内容がほぼ理解できることを目的として指導した。教科書に取り上げられている実験に使われている器具や装置の取り扱い方など、基礎的な物に重点を置き、説明をした。</p> <p>②社会生活を営む人として知っておくと便利な内容についてその時々話題やニュースをタイムリーに取り混ぜて様々な単元の学習を展開した。皆既日食があれば「天体・地球の動き」「光の進み方」「目の作り」など総括的に取り上げた。地震や津波がニュースになれば、地球の成り立ちや地殻変動・地層について学習した。インフルエンザなどの病気が流行したときには、予防や対策で生物学単元を組み、保健室に掲示される健康情報新聞等も活用し、体のつくりや構造について知り、健康で生き続けるために必要な知識を話し合ったりした。また、スーパーに並ぶ野菜などの名前や可食部分についての「根茎葉花実クイズ」等で植物の構造や健康的な生活について指導した。平成22年度から1分野と2分野をそれぞれ専門の指導者が分担して教科指導を行った。これにより、実験や観察など、直接触れて考えさせることができるようになった。</p>
英語	<p>①参加する生徒の学年も学力もまちまちで、覚えるスタイルもそれぞれ異なることが年々明確に感じられるようになった。0からスタートする生徒、すなわちアルファベットになじまない生徒もいるかもしれないことを念頭におきながら他の生徒と同様に学習を進めていくようにする。また、中1半ばまでは何とか覚えている生徒でも基本をしっかり身につけていない。はじめは自信がないので声を出すのが苦手な生徒が、慣れるまで時間を要した。参加生徒が一定ではないため、断続的になってしまい、定着が難しい。</p> <p>②自学自習をする生徒がぶつかる問題が①文字・単語を読めない②文の意味がわからない③書けないであろうということを念頭に置いて取り組んだ</p>

下の表は、数学について、4年間に行われた単元と参加延べ人数を表したものである。



18年度は、中学1、2年生の学習内容を教科書の順番に沿って、正負の数の加・減・乗・除を順に行っていたが、19年度になると、「計算」としてまとめて授業をしていることがわかる。また平成20年度には小学校の学習にさかのぼって復習の時

間を設けたこと、図形の学習回数と参加生徒数が多いことなどから生徒の実態に柔軟に対応して授業を行っていたことが推測できる。

(4) 中3トライアル

参加生徒のほとんどが中学3年生、中卒生であり、長期休業中も平均5人の参加があった。(12月末) 下は今年度の実施状況と課題をまとめたものである。

	国 語	数 学	英 語
実施回数	14	14	11
参加延べ人数	53	47	37
1回当たりの平均人数	3.8	3.4	3.7
題材や単元	高校受験に備えた学習内容で、22回の単元で組み立てた。各自が進めている学習にとって分野ごとの苦手克服対策として期待されるような題材を集めた。	1/2年の各単元ごとに基本と応用問題や過去問に取り組めるようにした。15回目からは3年の単元、実践問題を計画した。11月、12月には高校入試に備え、入試問題の1番の問題を練習する時間を設けた。	英文を読んで理解し、自分の考えや感情を伝えるコミュニケーション能力をアップさせる題材。
実施状況	少人数なので、質問なども随時受けられ、個別指導の時間が取れる。回数が限られているので学習が必要な分野すべての単元は組めないが、出席生徒はその回ごとの内容に対して意欲的に取り組んでいる。	後半はほぼ決まった生徒が参加している。単元のポイントや間違いやすいことを説明し、練習問題に取り組む。基本が終了すると個に応じたプリントを与えたり選択させたりして学習を進めた。特に計算力をつけることを目標にしている生徒には時間の後半から計算問題を中心に行っている。学習指導カウンセラーや大学生ボランティアに個別指導で協力してもらい、個に対応した取り組みができたと思う。	1、2年前までは長文読解など応用問題を意図的に多く取り入れた教材と基本事項習得に重点を置いて達成感を得られるような易しい教材の2本立てで進めた。次のシートへ個々が進めていけるようにした。生徒によって到達にかかる時間が多少違っていてもシートを終えることで、学習を進めることができた。
成果と課題	入試対応の内容を学ぶためには、まだまだ基礎的な学習が不足している場合が多くそれは学ぶほど自覚されてくる。中3トライアルの授業での学習が、その後の個別学習とうまく連動させられるようにしたい。	単元ごとに説明したいことや注意点などがたくさんあるが、時間をとりすぎると練習をする時間が不足し、50分の配分と週1回の授業でわかった、よかったという満足感を与える難しさを感じている。	英語学習を最初からスタートさせなければならない生徒が数人いたことから、基本を身につけることを中心にした結果、意外にも重要構文の反復練習や、声を出して基本文を言うなど基本的な練習が、英語力のある生徒たちにとっても役に立つ学習方法であることがわかった。「これくらいはわかる」ではなく「英語は苦手だからしっかり覚えたい」という生徒たちの謙虚な姿勢が、覚える力につながるのではないかと思う。

(5) 読書

1時間目に本に向かう時間と場所を確保した。毎回平均3人程度の参加がある。継続的な読書は知的好奇心の向上とともにその後の学びを支えるものになってい

る。

(6) スキルアップ

通所している子どものうち2名が参加した。検定学習進行表に、取り組んだ日付を記入し、目標をもって計画的に学習を進め、より上級の合格を目指して励む姿が見られた。歴史能力検定1名、漢字能力検定1名が、イオで受検した。

2 集団適応支援プログラム

(1) ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルトレーニングは、学習指導カウンセラーが木曜日の4時間目(45分間)に、エンカウンターと交互に隔週で実施している。自由参加のため毎回参加人数は異なり、7～14名の人数が参加している。グループワークや作業課題、ゲームなどを通して、それぞれの参加者が楽しみながらソーシャルスキルを身につけていけるよう工夫した。また、よりよい人間関係を築くためのプログラムの他に、心理教育や表現療法なども取り入れて行った。

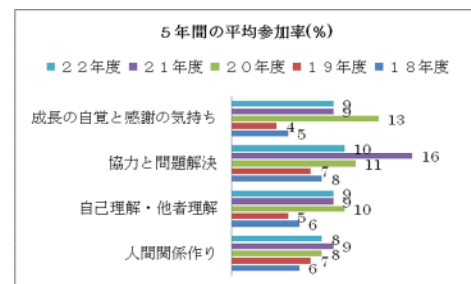
今年度は秋田大学大学院心理教育実践専修の学生5名が、不登校生徒への理解を深め、生徒との関わり方を学ぶという目的で実習を行った。実習は、5月～9月の間に1人3日間の日程で行った。学生は、学習指導カウンセラーの補助としてソーシャルスキルトレーニングにも参加した。

<ソーシャルスキルトレーニングの感想>

メニュー	感想	考察
自己紹介をしよう	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介をして、自分のことを知ってもらい相手のことについてもよく知ることができた。 緊張したけど楽しかった。 	<p>どんなところを紹介するのかを示すことで、緊張しながらも的確に自分の情報を他者に伝えられていた。</p>
仲間に誘う・加わる	<ul style="list-style-type: none"> 新しい友達と仲良くなれたのでよかったです。 仲間に加わるのは難しいから、タイミングなどが大事だと思いました。 仲間に誘うのも加わるのもよく使うので忘れないようにしたい。 	<p>他者と関わるのが不得手な生徒でも、和やかな雰囲気の中でポイントを確認しながらワークに取り組むことでスキルを習得することができていた。</p>
きっぱり断る	<ul style="list-style-type: none"> 断るときには、理由を伝えたり代替りの提案をすることで相手にわかってもらえるということがわかった。 断り方を改めて知った。 	<p>アサーティブな態度で、お互いにストレスにならないような断り方が実践できていた。</p>

(2) エンカウンター

自由参加であるため毎回参加人数は異なるが、平均11人の参加があった。オープンなスペースで行っているので、直接参加しない子どももエクササイズの様子を見たり聞いたりしている姿が見られた。実施エクササイズは【資料3】のとおりである。



5年間の参加率から、「協力と問題解決」をねらいとしたエクササイズの参加率が比較的高い。自分や他の人のある程度理解できた上で、他と協力することを通して問題を解決していく心地よさに気づくことができたのではないかと推察できる。

<エクササイズに参加しての感想（一部）>

エクササイズ	感想	考察
みんなでリフレミング	<ul style="list-style-type: none"> ・短所を長所にすることを心がければ自分を好きになれるかもと思った。 ・自分の短所がいやでどうしようもないと思っていたけれど、長所に変えてくれて安心した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・近い年齢からの評価が気になる中学生の発達段階に相応しいエクササイズだったと思われる。予想以上に喜びを感じた感想が多かった。
上手にNOと言おう	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に断られたらこっちもできただけ優しく答えようとするし、優しい気持ちになれる。 ・断るのは苦手な方だが、断り方をマスターして実際に使ってみたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌といえない、限界以上のことを引き受けてしまう、断れない自分が嫌になってしまうことの多い生徒にとって毎年継続したいエクササイズである。

(3) スタディワーク

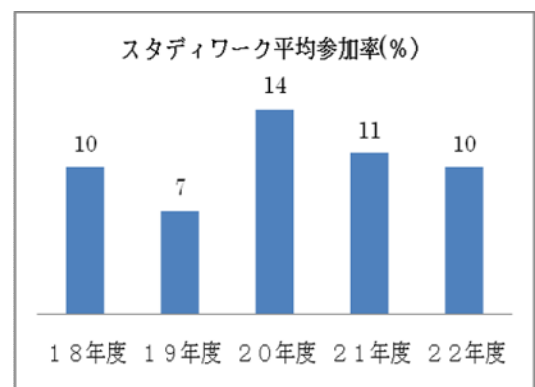
不登校のため理科の実験や観察をほとんど経験していない生徒が多い。また同年齢の子どもたちと比較して野外での体験も乏しい。そのため平成17年度から科学遊び・もの作り・実験や観察を通して、理科学習の楽しさを体験することをねらいとした「スタディワーク」を実施した。平成18年度からは地理や歴史などの社会的な内容もプラスしている。5年間の平均参加率は10%前後である。本年度の実施状況をまとめると以下のようになる。【資料4】

- ① 20回実施し、延べ125人の参加である。毎回6人前後の生徒たちの参加があった。
- ② 基本的には3グループ編成で、各グループが教師も含めて5～7人程度の構成で展開した。教師からのアドバイスや支援を受けたり、また生徒同士の協力や関わりを楽しんだりしながらの取り組む姿が見られた。
- ③ スタディワークの学習内容に興味をもち、積極的に参加する生徒が目だった。「振り返り学習記録カード」を通して、自己評価や一言感想の記録にも取り組ませた。これは評価の材料として活用のため在籍校へ提出を促している。

【本年度の主な学習内容】

【5年間の平均参加率】

理科	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろ科学実験（携帯電話の分解、酸とアルカリ、質量と時間、光、顕微鏡の不思議な世界、モーターの仕組み、地球の大きさを測ろう等） ・アルヴェ自然科学学習館（-200度の世界、炎色反応）
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・千秋公園でスタディ（佐竹史料館） ・勾玉作り・クイズでスタディ（地理・歴史クイズ） ・その時歴史が動いた ・市民市場で特産品ビンゴ 等



(4) カルチャー&アドベンチャー

<今年度の取り組み>

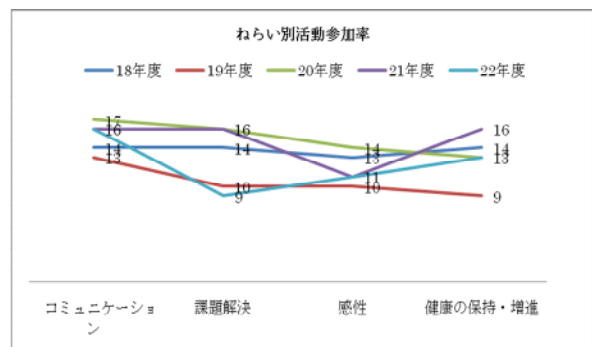
集団活動や体験的な活動を通して毎週金曜日の午後、①コミュニケーション能力の向上②課題解決能力の向上③豊かな感性の育成④健康の保持増進を図ることをおこなねらいとして年間計画を作成（資料4）実施した。昨年度同様、NPO法人「不登校を考える親の会あきた」と連携した活動や行事に向けた活動、秋田市環境企画課、国

際交流協会、本校の職員などの協力を得ながら、多様な活動を展開することができた。体験的な活動の他、校外学習や本校の文化祭「明德祭」への展示参加、「クリスマス音楽会」等の事前学習の時間としても定着してきている。活動を通して自然な形で教師や生徒同士のコミュニケーションが図られたり、協力したりすることができた。

〈5年間の取り組み〉

	活動名
NPO「不登校を考える親の会あきた」の連携	調理（にぎり、デザート作り、もんじゃ焼き）リトミック 昔遊び パステルアート ハンドベル 百人一首 スポーツ クリスマス音楽会 バルーンアート読み聞かせ ハロウインの準備 雪見遠足
スポーツ	室内：卓球、バスケットボール、バドミントン、バレーボール、フットサル グラウンド：キックベース、野球 スケート教室 ボウリング ※ 「イオスポーツフェスティバル」室内ゲーム他
行事	「校外学習」「明德祭」「クリスマス音楽会」「修了式」「七夕コンサート」
校内の職員・イオ修了生等	修了生の話：「ようこそ先輩」通信制秋山先生：「音楽」定時制照井先生：「七夕茶会」司書鈴木さん：「読み聞かせ」技師松田さん：「ハモニカコンサート」 定茶道部、照井先生「夏・冬のお茶会」通信制石井先生「パソコンに挑戦」
校外活動	「秋田市民俗芸能伝承館」「県立博物館」「自然科学学習館」「小泉湧公園」 「千秋美術館」「赤れんが郷土館」「院展」「県立美術館」「NHK放送局」「千秋公園」 「スポーツ会館」
外部講師	JICA出前講座 国際交流協会アラカルチャーサポーター：異文化の学習 秋田市 環境企画課出前講座 秋田県出前講座：「命見つめ続けて」
その他	DVD鑑賞 お茶に親しむ 「季節を感じて」「風鈴作り」「ハートポップ作り」

① 週1回の活動で年間27回程度の実施であった。開設当初から①のNPO「不登校を考える親の会あきた」が企画・運営に協力し実施してきている。NPOへイオの生徒やイオの活動を理解してもらったりNPO側のボランティアにイオについてや不登校の児童生徒を知ってもらったりする機会となっていて、6年間継続している活動がほとんどである。



- ② スポーツは、イオの生徒にとって体を十分に動かす唯一の活動である。それぞれが自分の好きな運動を思い思いに楽しみ汗をかく経験をすることで心身のリフレッシュを図ることができ、またスポーツを通して友達と交流したり、ゲームのルールや運動の仕方そのものを学ぶ機会となった。体育館の使用は、校内の協力を得て、月曜日の午後の時間をイオ専用を設定している。カルチャー&アドベンチャーの年間計画では、他の活動との調整が必要となり、活動できる回数が限られているが、「イオスポーツフェスティバル」「ボウリング」など、行事と兼ねながら、スポーツの時間を今後も増やしていきたい。
- ③ 開設当初から継続して行っている活動の中で「七夕コンサート」以外を行事として実施している。18年度に実施した「七夕コンサート」は前期の発表の場であったが、19年度以降は前後期を合わせて1年間の成果として「クリスマス音楽会」を位置づけ

ている。それぞれの行事は、生徒の希望参加ではあるが、学習活動の発表の場として、また、生徒役割を担い、活躍できる場として今後も継続していきたい。

- ④ 校内には、様々な専門分野の職員が多数いる。校内の職員の協力を得ながら、新しいことにチャレンジして、生徒が興味関心を高めるとともに、校内の職員にスペース・イオやイオの生徒について理解を深めることにもつながっている。
- ⑤ 本校は立地条件に恵まれた秋田駅前であり、千秋公園等をはじめ、近隣の文化施設など生徒自身が出かけて見学できる施設に恵まれている。交通の便もよく、積極的に校外での活動を進めることで、文化的な関心を高め、公的な施設や機関の利用の仕方を学ぶ機会となっている。
- ⑥ 外部講師の招聘について、「異文化交流」は継続して行っている活動である。生徒には好評であるが、「秋田市環境企画課出前講座」は、今年度から「スタディワーク（理科）」の活動として実施した。カルチャー&アドベンチャーで取り上げる活動については、他の活動とも調整を図り、新たな企画も探していきたい。

5年間の取り組みを通して、NPOの連携・協力のもとで行う活動や行事、その行事に関わる活動等が精選されてきている。今後の課題として、時間数が限られるため1時間だけの活動がほとんどである。スポーツ等、継続して指導することが望ましい活動についての時間確保や生徒の実態に合った行事の計画立案、タイプⅢの生徒等も無理なく参加できるような活動内容の工夫に向けて取り組んで行かなければならない。

(6) 相談タイム

学習指導カウンセラーとの個別相談の時間を月曜と木曜日に1時間ずつ設定し、希望者の相談に応じた。希望者が多いときは、上記の時間帯以外にも相談タイムを設けるなどして柔軟に対応した。個別相談では、問題解決へむけた目標設定、心理的安定による学習・生活への意欲の高まりなどを目的とし、関わりを行った。

月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
利用人数	5	14	5	4	10	9	13	8	8	3	0	79

*5～7月、11～12月は「こころとからだの健康調査」とともに実施した個別面談も含まれる。

*この相談タイムの他に、スクールカウンセラーによるカウンセリングも行っている。

3 I T 等を活用した学習支援の実際

ひきこもり傾向の強い生徒や遠方のため通所が困難な生徒に対して、I TやF A X等を活用した学習支援を実施している。これは学習意欲を高めながら対面指導につなげ、学習の機会を拡大するものである。また、この学習は在籍校において一定回数の対面指導を満たすと出席日数として認定することができる。

I T学習の実施に当たっては、各社のコンセプトを比較検討した。その結果以下の優位性により、平成17年度からN T TレゾナントのH P「ウェブでスクールプラス」（「W E Bで宿題」）を使用している。

「ウェブでスクールプラス」の優位性	
①	メール機能と学習機能の双方を有するものは、現在このN T Tのもののみである。
②	生徒はニックネームを登録するだけで、個人情報登録する必要がなく安全性が高い。
③	ソフトサービスとなっており、設備の運用や維持に関する利用者負担が少ない。
④	保護者や在籍校の担任等の教員も個別のI Dで参加できるシステムである。

(1) I T等学習の状況(2010.3 現在)

I T等学習の教科数別の生徒数、年間延べ学習人数、学年別をそれぞれ表にすると以下ようになる。

内 容 項 目	中 1	中 2	中 3	中 卒	計(人)
I T担当とのI T学習 (FAX・郵送も含む)	2	7	20	3	32

- ① F A X利用2名、プリントの郵送2名である。
- ② 本年度は在籍校の先生と定期的にメールのやり取りしている生徒はいない。

【教科数別】

教 科 数	中1	中2	中 3	中 卒 者	計 (人)
1 教 科	0	0	2	2	4
2 教 科	0	1	0	0	1
3 教 科	1	0	7	0	8
4 教 科	0	0	0	0	0
5 教 科	1	5	12	1	19
計 (人)	2	6	21	3	32

- ① 84%の生徒が3教科以上の教科学習に取り組んでいる。昨年度より9ポイント低い。
- ② 5教科の学習に59%の生徒が取り組んでいる。昨年度より9ポイント低い。

【年間延べI T等学習人数 h23. 3. 15 現在】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
延べ人数	59	173	251	152	148	224	232	200	183	155	158	55	1990
1日平均	5.6	9.6	11.4	8.9	7.4	12.1	11.6	10	10.8	9.1	8.7	9	9.5

【I T等学習回数】

回数\学年	中学1年生	中学2年生	中学3年生	中 卒 者	計 (人)
0～ 40	2	1	10	2	15
41～ 80	0	3	4	0	7
81～120	0	0	2	0	2
121～160	0	2	3	0	5
161～200		1	1	1	3
計 (人)	2	7	20	3	32

- ① 年間40回以下の生徒が全体の44%で前年度と比較して18ポイント高くなった。

- ② 年間 81～200 回の生徒は 31%で、前年度比で6ポイント低くなった。

(2) メール機能等によるコミュニケーションの効用

メール機能等によるコミュニケーションの効用として以下の5点にまとめられる。

- ① 様々な話題で緊張をほぐし、スムーズな学習支援へと移行できる。
- ② 教科、進度、レベル等に関して、より生徒の実態に合うものに調整できる。
- ③ 間違っただけの解答や答えられなかった問題についての説明や解説を行う。
- ④ 予定表等の機能も併用し、通所での学習や活動のイメージを提示できる。
- ⑤ 在籍校の担任のメール参加により、関係者の連携の深まりにつながる。

(3) 学習機能の活用と学習の進め方

IT学習機能の活用とその学習の進め方をまとめると次のようになる。

- ① 入所後に学習相談を実施し、学習計画について話し合う。
- ② 主担当からのメールの開封、簡単な問題へのトライを通し使い方に慣れる。
- ③ IT担当が学習計画に基づいた問題を送信する。
- ④ 生徒が解答やメールを返信する。
- ⑤ IT担当が採点し、誤答や解答できない問題の解説を返信する。
- ⑥ 主担当とIT担当との連携を密にし、定期的に学習状況を把握する。
- ⑦ IT学習を通して、他の教材での学習や通所への呼びかけを行う。

(4) 「ウェブでスクールプラス」の新機能の実施について

学習機能とメール機能中心の支援とともに、スペース・イオをIT学習の生徒にもっと身近で親しみやすく感じてもらうため、「ウェブでスクールプラス」の①掲示板 ②アルバム③アンケートの各機能を利用して、情報発信を行った。

- ①**掲示板** 毎週月曜日、通所生向けに行っている連絡タイムの内容を添付ファイルとして添付し、その週の行事や連絡事項を周知した。
- ②**アルバム** 画像を添付できる機能で、週末にその週のトピックスを画像と文章で紹介した。
- ③**アンケート** 学習の機能は活用しているが、メール機能での返信のない生徒の反応を引き出すことと、学習活動への興味関心の向上をねらいとし、アンケートを14回行った。平均回収率は23%だった。



アルバム/新聞機能

春を待つ心で～冬のお茶会～

主題		副題	
IT学習の皆さんへ		～IT学習について～	
対象グループ	全校	対象属性	生徒
回答期間	2009年12月16日 14時 ~ 2010年01月08日 14時		
回答数/全件数	13/25名	回答率	52%
メモ			

No.	質問	回答	件数
1	多目的掲示板を見ていますか?	はい	11
		いいえ	2
2	連絡タイムの添付ファイルを見ていますか?	はい	9
		いいえ	4
3	アルバム/新聞を見ていますか?	はい	9
		いいえ	4
4	家のパソコンは、何ですか?	Windows	13
		MAC	0
		その他	0
5	IT学習以外に勉強していますか?	して、はい	4
		して、いいえ	6
		勉強無し	1
		その他	2
6	IT学習をやった良かった	はい	12

アンケート機能

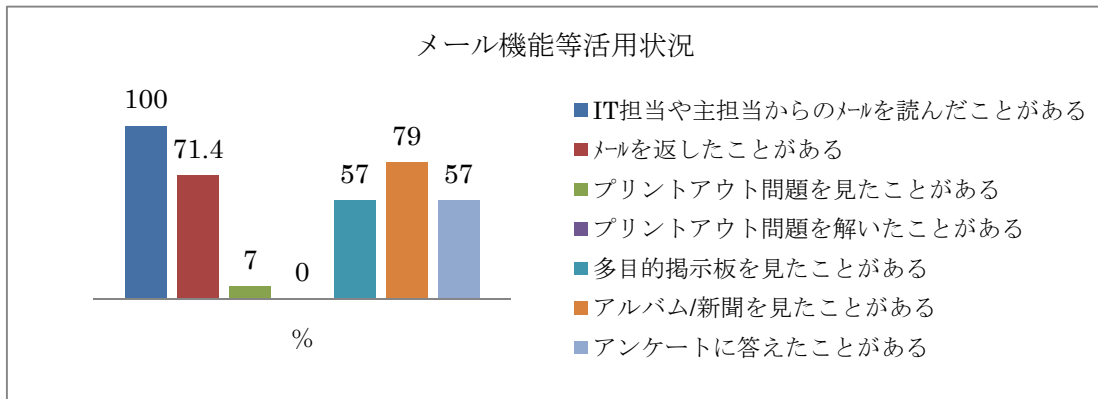
アンケート画面

【メール機能等活用状況】

アンケート機能を利用して、活用状況について調査を行った。

実施時期：2010. 12. 22～2011. 1. 14

回収率：56%（25人中14人返信）



(5) IT等学習の成果

本年度取り組んでいる生徒31名の改善状況をまとめた。

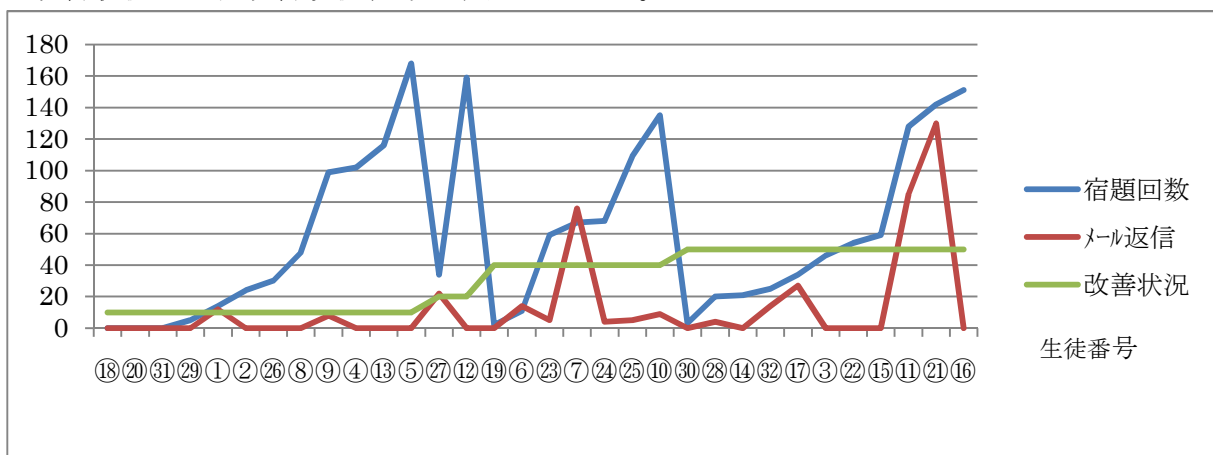
【IT等学習による改善状況】

改善状況番号	主な改善状況	中1	中2	中3	中卒	計(人)
10	IT等学習に取り組むことができた	1	3	6	2	12
20	IT等学習に取り組む回数や教科数が増えた	0	0	1	1	2
30	家庭訪問時に担任と会えるようになった。	0	0	0	0	0
40	スペース・イオに通所できた		4	2	0	6
50	在籍校への登校等ができた	1	2	9	0	12
計(人)		2	9	18	3	32

・イオ通所や登校につながった生徒は、53%で前年度と比較し5ポイント上がった。

【生徒別宿題回数、生徒からのメール返信回数、改善状況】

改善状況は上表改善状況番号を利用している。



・宿題回数、メール返信回数ともに増加して改善傾向にある生徒がいる一方で、宿題回数は多いものの、低いまま現状維持の生徒もいる。宿題回数が増加していることをきっかけにして、改善をさらにすすめていきたい。

V 学校・保護者等との連携のあり方

スペース・イオは、設立当初から、在籍校や保護者とイオの連携を重視して、様々な取り組みを行っている。以下は今年度の取り組みの主なものである。

1 学校(在籍校)との連携を深めるために

(1) 入所にあたって

入所申請は、保護者や本人が作成した申請書に学校が指導の記録である副申書を添えて市町村教育委員会経由でスペース・イオに提出される。学校、市町村教育委員会、教育事務所が入所申請の状況を把握することで、各機関のバックアップのもと支援が行われる体制である。

(2) 在籍校校長と本校校長の情報交換(校長面談)

平成 21 年度までは、スペース・イオの周知と理解を目的に、在籍中学校長にスペース・イオを訪問してもらい、本校校長との面接を実施し、スペース・イオの運営方針等の説明とともに、子どもについての情報交換、今後の指導の方針や連携の重要性を確認し合ってきた。今年度から、本校校長の中学校訪問と兼ね、本校校長または管理職が、入所申請のあった子どもの在籍中学校へ訪問し、上記の内容を伝えた。前期は中学校 21 校、後期は中学校 2 校の在籍校を訪問し、校長面談を実施した。高校の学校訪問と兼ねたことで、生徒の細かな情報交換が難しく、イオ担当者が直接訪問した方がよいケースもあったが、概ね良好で、在籍校とのその後のスムーズな連携につながった。

(3) 「記録」の交換

スペース・イオでは、子どもの出席状況や学習状況等について主担当が毎月、個人毎に報告書を作成して在籍校に報告している。また、在籍校からも登校状況や家庭訪問の状況などについての「在籍校での指導の記録」を提出してもらっている。これにより、スペース・イオと在籍校が子どもの変容に対しよりタイムリーに連携しての対応ができる。

(4) 「評価」に関して

文部科学省初等中等教育局長通知の「不登校児童生徒の学習状況の把握と学習の評価の工夫」の趣旨にもとづいて、在籍校校長あてに本校校長名で「不登校児童生徒の調査書等への『評価』の記入について(依頼)」の文書(平成 18 年 7 月 5 日付)を送付している。

これ以後、在籍校職員のスペース・イオ訪問や家庭訪問等がより多く行われるようになり、適切な評価に向けた在籍校の取組が進んできている。

(5) 在籍校担任等連絡協議会の開催

本年度も夏季休業中に「児童生徒在籍校担任等連絡協議会」を開催し、不登校児童生徒の担任を中心に 18 名の参加があった。協議会では「イオの概要説明とアンケート結果報告」、「不登校生徒対応についての発表」(常盤中学校)、「相談室の運営についての発表」(城東中学校)、そして「不登校の生徒対応・未然防止についての協議」を行った。

(6) スペース・イオ説明会の開催

開所から平成 19 年度までの 3 年間は、「スペース・イオ入所説明会」という名称で実施してきた。2 年目からは対象を学校関係者等とし、スペース・イオの運営に関する説明、

入所手続き等の内容である。平成20年度からは開催の趣旨をより反映した「スペース・イオ説明会」と名称を変更した。またこの説明会がより多くの学校関係者のスペース・イオ理解につながるよう、今まで参加していない方への出席も呼びかけてきた。以上のような取り組みにより、スペース・イオが周知され、手続き等も円滑に行われるようになってきていることから、6年目となる今年度で閉会とし、今後は新たな活動に向けて取り組んでいきたいと考えている。

(7) 在籍校担任等のイオ訪問の推進

在籍校との校長面談時にも協力を依頼し、担任や相談担当職員のイオ訪問を推進した。訪問の目的は、担当児童生徒に関する主担当との情報交換、イオの見学、及び担当児童生徒との学習や進路に関する面談等である。

本年度8校、延べ16回の来所があり、個々の児童生徒への支援の充実につながった。

2 保護者との連携

(1) 保護者会の活動

スペース・イオの教育活動の支援と保護者の研修、親睦を目的に次のような事業を行った。

月 日	保護者会事業	内 容
5月20日	保護者会総会	役員選出、事業計画及び会計予算案について（参加者26名）
8月 2日	第1回役員会	第1回保護者会に向けて
8月28日	第1回保護者会	成田ひとみ臨床心理士の講話、懇談会（参加者19名）
10月22日	第1回会計監査	会計監査第
11月17日	第2回役員会	2回保護者会に向けて
12月11日	第2回保護者会	大屋みはる先生の講話・懇談会（参加者20名）
3月 4日	第2回会計監査	会計監査・会計決算報告について
3月12日	保護者会総会	会計決算報告（修了式後）

保護者会では、講話、体験談、懇談等が行われた。アンケートには「貴重な時間で、親が元気をもらえる大切な機会だ」「他の保護者と親しくなることができた」「是非続けていってほしい」などの声が寄せられた。今年度も保護者会を機に保護者同士で連絡を取り合い、任意で情報交換の場を設ける動きも見られた。保護者がお互いに連携する場として、保護者とイオのスタッフが信頼関係を築く場として、今後も保護者会はますます重要になっていくと思われる。

(2) 保護者面談

スペース・イオでの子どもの様子、家庭での様子、スペース・イオへの要望等に関する情報交換を目的に、夏季休業中に主担当が保護者との定期面談を実施している。秋には、高校進学をめざしている子どもの保護者に対して、必要に応じて随時面談を実施し、進路希望の確認や進路相談を行っている。2月には、中2以下の子どもの保護者と、今年度の様子についてと来年度の方向性についての話し合いの場を設けている。これらの面談を通して、子どもの多様な状況が確認でき、より有効な支援に結びつけることができた。

3 NPOとの連携

「不登校を考える親の会あきた」（以下「親の会」と表記）は不登校の子どもを持つ親が中心となり、平成10年発足した団体であるが、平成17年5月NPO法人となった。

長年にわたり不登校の子どもや保護者への相談支援活動や体験的な集団活動の企画・実施等で多くの実績を上げてきた。「親の会」と連携することで、外部から多くの支援が得られ、スペース・イオの活動は広がりを持ち、子どもたちへのさまざまな関わりが可能となった。

(1) 体験的活動における協同

スペース・イオの学習プログラム中の「カルチャー&アドベンチャー」において企画やスタッフの派遣等の面で協力を得ることができた。「親の会」スタッフやボランティアによるきめの細かい支援によって生徒の希望に応じたグループ活動が実現でき、支援を受けながら活動にじっくりと取り組むことができた。

実施日	内 容	親の会指導員等数	参加児童生徒数
6 / 20	ポップコーン作り	3	10
9 / 17	パフェ作り	3	5
10 / 15	パステルアート	3	7
11 / 26	クリスマス音楽会に向けて1 カード作り	3	13
12 / 3	クリスマス音楽会に向けて2 カード作り	3	14
12 / 10	クリスマス音楽会に向けて3 会場装飾	3	16

(2) NPOの諸活動とスペース・イオ

「親の会」の事業の一つとして、フリースクール「KOU」がある。毎週水曜日午後1時からされており、スペース・イオへの来所がまだ安定しない子どもたちが参加し、親の会のメンバーと話をしたり、勉強を教えてもらったりしながら過ごした。また、カルチャー&アドベンチャーには、世代を超えた交流やスペース・イオ以外の場での活動に参加することで、子どもたちは体験を深め、社会的適応の領域を広げていった。

「親の会」では、いろいろな悩みを抱えている不登校児童生徒の保護者に対して相談活動も行っている。さらに平成20年には新たに若者自立支援ネットワーク「サポートステーションあきた」が開設され、スペース・イオへ寄せられる相談の際に、中学校卒業後の子どもたちへの支援機関として紹介している。

(3) 文部科学省実践研究事業の継承

文部科学省の実践研究事業としてスペース・イオが取り組んできた2年間の調査研究を土台に、それを引き継ぐ形で「親の会」が「平成19年度不登校への対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業」を実施した。(平成19年7月1日～平成20年3月31日)。「ひきこもり傾向にある児童生徒及び保護者に対する効果的な訪問指導の在り方」「児童生徒及び保護者の交流の場づくり」が研究テーマであった。。この実践研究事業の実施により、ひきこもり傾向にある児童生徒への効果的な働きかけと回復へのプログラムの充実が図られた。

4 関係機関との連携

(1) 「まなび」ネットワークアドバイザー

県南、県北地区に設置されるフリースクールの空間の円滑なスタートのために、平成1

9年に「まなび」ネットワーク拡大支援事業が実施された。これにともない、「まなび」ネットワークアドバイザーが配置され、上記の目的とともに不登校児童生徒の状況を把握して在籍校や適応指導教室等との連携の方途を探るなど、より多くの不登校児童生徒の支援の充実を図るため活動した。

「まなび」ネットワーク拡大支援事業は平成19年のみの実施であったが、「まなび」ネットワークアドバイザーの配置は継続され、2年間に渡って以下のような活動を行った。

①スペース・イオよこての円滑なスタートに向けた支援

スペース・イオよこては平成20年6月に開所となり、開所前の立ち上げ支援や開所後の運営支援を行った。スペース・イオでの支援や運営をモデルとしつつ、県南地区の特徴を踏まえての「スペース・イオよこて」作りに「まなび」ネットワークアドバイザーの役割は重要であった。

②小中学校の相談室や適応指導教室へのスペース・イオのシステムと成果の周知

平成20年度は18校（県南6校、男鹿南秋5校、秋田市7校）、教頭会5回（男鹿、大館、鹿角、能代市、大曲・仙北）、適応指導教室延べ7回（おおとり、北さわやか、はまなす、中央さわやか、フレッシュ広場、横手かがやき）に訪問した。スペース・イオのシステムや成果を伝えるとともに、小中学校では不登校児童生徒の対応や相談室運営のあり方についての情報交換を行った。

「まなび」ネットワークアドバイザーの活動によって、全県的にスペース・イオの周知及び関係機関との連携が進んだ。平成21年度以降は、教育専門監が中心となって、小中学校や適応指導教室との連携、県北地区へのスペース・イオ設置に向けての活動を推進を進めている。

VI 成果と課題

1 生徒の改善状況

(1) 全体的な改善状況

一人一人の生徒の入所前や入所当初の様子から現在の状況を確認・比較してみると次のような改善状況にまとめられる。

タイプ別	登校行動あり	登校の意志あり	回復傾向	ひきこもり状態	計(人)
タイプ1	19	0	20	0	39
タイプ2	2	0	6	0	8
タイプ3	9	1	11	2	23
計(人)	30	1	37	2	70

①「登校行動あり」の割合は43%、「登校の意志あり」が1%、回復傾向は53%であり、「ひきこもり状態」は3%であった。全体としての改善率は97%で、昨年度より1%増加している。「登校行動あり」の割合は昨年度より減少しているが(昨年度65%)、「回復傾向」は昨年度に比べて倍増(同25%)している。

これらのことから、今年度のイオの生徒の傾向として、登校に関しては、実際に行動したり意識したりすることは難しいものの、以前に比べると、イオに来所できるようになったり、家族と外に出かけたりなどの改善点が見られるようになった生徒が多いと言える。

②「ひきこもり状態」の生徒は2名ともタイプ3の男子である。

(2) 具体的な生徒の変容

イオでの学習や活動の様子、学校との関わり等から、生徒の具体的な変容を挙げると以下ようになる。

① 通所の生徒の変容

- ・ 通所しての学習時間や日数が増える。
- ・ 学習教科が増える。
- ・ 自学自習のみから個別学習も受ける。
- ・ 授業形式の学習に参加する
- ・ 体験・集団学習のスタディワークやカルチャー&アドベンチャーに参加する。
- ・ ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターに参加する。
- ・ 英語検定や歴史検定等にチャレンジする。
- ・ 高校の選抜試験を受験する。
- ・ 来所できないときも学習するためにタイプ1から2へ変更した。

② IT等学習の生徒の変容

- ・ メールや電話等でのやりとりが始まる。
- ・ 教科数が増える。
- ・ 学習回数が増える。
- ・ 学校の教科書やワーク等の学習にも取り組み、学習の広がりが見られる。
- ・ タイプ変更(2から1へ)し、週5日通所する。

③ 学校との関わり等の変容

- ・ 家庭訪問時に担任と会うことができる。
- ・ イオで学校の実力テストや課題テスト等を受ける。
- ・ 学校祭や合唱祭、修学旅行に参加する。
- ・ 学校またはイオで二者又は三者面談等を受ける。
- ・ 登校して別室で学習したり、テストを受けたり、部活動に参加したりする。
- ・ 登校日数が増える。
- ・ 教室での学習に参加する(含給食)。

④ その他

- ・ スペース・イオの個別ブースから共有スペースへ移り、自学自習に取り組む。
- ・ 校外学習(プラザクリプトン、国際教養大学の見学)に参加する。
- ・ クリスマス音楽会への出演および係り、参観者として参加する。

2 平成17、18、19、20、21年度入所生徒の高校進学後の状況

開所から平成21年度までの「進路決定状況」及び「高校進学後の状況」は次の通りである。

【平成17年度】

平成17年度 中学3年生、中卒者の進路決定状況 (在籍30人中)					
明德館高等学校		公立高	私立高	イオ継続	その他
定時制	通信制				
9	9	3	3	5	1
18					
24				6	

(高1)

平成17年度入所生徒の高校進学後の状況					
平成18年9月調査					
	成績 上位者	成績 中位者	成績 下位者	その他	計
出席良好	6	6	1	0	13
欠席がち	2	1	1	0	4
欠席多い	1	0	0	*6	7
計	9	7	2	*6	24

* 休学、進路変更の予定等

【平成18年度】

平成18年度 中学3年生、中卒者の進路決定状況 (44人中)					
明德館高等学校		公立高	私立高	イオ継続	その他
定時制	通信制				
15	14	1	7	4	3
29					
37				7	

(高1)

平成18年度入所生徒の高校進学後の状況					
平成19年9月調査					
	成績 上位者	成績 中位者	成績 下位者	その他	計
出席良好	20	5	2	0	27
欠席がち	1	0	3	0	4
欠席多い	0	0	0	6	6
計	21	5	5	*6	37

* 休学、転校等

【平成19年度】

平成19年度 中学3年生、中卒者の進路決定状況 (60人中)					
明德館高等学校		公立高	私立高 含NHK学園	通信制 サポート校	その他
定時制	通信制				
28	10	8	3	5	6
38					
54				6	

(高1)

平成19年度入所生徒の高校進学後の状況					
平成20年11月調査					
	成績 上位者	成績 中位者	成績 下位者	その他	計
出席良好	17	13	5	0	35
欠席がち	0	1	1	0	2
欠席多い	0	1	4	12	17
計	17	15	10	*12	54

平成19年度分の追跡調査は在籍校で実施
* 休学4名、転校等4名、その他4名

【平成20年度】

平成20年度 中学3年生、中卒者の進路決定状況 (51人中)					
明德館高等学校		公立高	私立高 含NHK学園	通信制 サポート校	その他
定時制	通信制				
16	14				
30		5	8	2	6
45					6

(高1)

平成20年度入所生徒の高校進学後の状況 平成21年12月調査					
	成績 上位者	成績 中位者	成績 下位者	その他	計
出席良好	10	18	5	0	33
欠席がち	0	1	0	0	1
欠席多い	0	0	0	3	3
計	10	19	5	3	37

平成20年度分の追跡調査は在籍校で実施
* 休学2名 記載なし1名 連絡とれず1名 未回収4名

【平成21年度】

平成21年度 中学3年生、中卒者の進路決定状況 (46人中)					
明德館高等学校		公立高	私立高 含NHK学園	通信制 サポート校	その他
定時制	通信制				
17	6				
23		6	8	4	6
41					5

(高1)

平成21年度入所生徒の高校進学後の状況 平成22年11月調査					
	成績 上位者	成績 中位者	成績 下位者	その他	計
出席良好	17	10	3	0	30
欠席がち	1	2	0	0	3
欠席多い	0	2	1	4	7
計	18	14	4	4	41

平成17、18年度分に関しては、スペース・イオで追跡調査を行った。調査時には、高校進学者の20%程度は欠席が多くなり、休学等の手続きを取る予定であるが、残り80%程度は、順調に単位を取得しつつあり、大多数が学習面、出席面で学校生活に適應しているという結果であった。

平成17年度入所生徒に関しては、2年間の追跡調査を行っているが、高校1・2年の状況を比較すると、1年次よりも2年次の方が学習成績、出席状況とも向上している。クラス担任からは、諸行事にも積極的に取り組み、リーダー的存在になっている者も多い、との回答が寄せられている。また、秋田明德館高校に進学した生徒は、スペース・イオの子どもたちの相談相手となったり、よい影響を与えたりしている。

平成19年度分は在籍校27校のほぼすべての学校から報告をもらっている。出席及び成績面では、過去2年間と同じような傾向であった。生活面でも周囲が驚くほどの変容を確認できたり、大学進学を目指したり、生徒会や部活動で活躍したりしている生徒も目立つ。

平成20年度分は在籍校26校中25校から報告をもらっている。90%が出席良好で、成績も中位から上位に位置しており、高校入学をきっかけに不登校をリセットしたいと考えた生徒が、それぞれ高校生活での自己実現をめざし、学習面でも成果を出そうと頑張っている姿が推察される。19年度にくらべ、欠席が多いとされる生徒が少ないことも20年度の特徴である。

平成21年度入所生に関しては、イオで聞き取り調査を行った。生徒会活動、部活動等で活躍している生徒が多く、学習面でも上位者が多かった。

また、調査を行って以来の明德館高等学校への進学率は、56%から80%を推移しており、イオの子どもたちの進学先としては一番多くなっている。理由として考えられることは、イオに来ることで同じところにある明德館高等学校が身近に感じられ、居場所として安心感を持つということであろうか。

今年度からイオで調査を行うことにより、生徒の様子を具体的に把握できた。次年度以降もイオで実施する方向で行いたい。

3 平成17年度からの利用者の状況と分析

平成17年度から今年度までのスペース・イオ利用者（実質人数）301名についての状況と分析を行ってみた。

【不登校の原因】

	①いじめ	②友人とのトラブル	③学力	④病気	⑤発達障害	⑥その他	⑦不明	計
h17	16	12	3	7		5	15	58
18	7	10	2	8		15	7	49
19	6	14	1	12	1	20	6	60
20	5	4	4	17	4	23	5	62
21	3	6	3	7		23	2	44
22	2	5	1	5		10	5	28
計	39	51	14	56	5	96	40	301

・病気等には、頭痛、腹痛、起立性調節障害、けがなどの欠席がきっかけなどの場合も含まれる。

・その他は、部活動、体調不良、家庭環境、対人関係や集団行動が苦手等である。

・いじめや友人とのトラブルなど、原因がはっきりしている場合が減少し、その他が全体の32%である。不明が13%で、合わせると45%が、明らかな原因が分からなかったり、様々な要因が複合的にからみあって不登校に至っているケースである。

【不登校の期間】

入所時の聞き取りによる不登校期間である。

	0～1	1～2	2～3	3～4	4～5	5～6	6～7	計
h17	9	16	19	4	6	3	1	58
18	22	18	8		1			49
19	39	17	3	1				60
20	47	10	4		1			62
21	35	6	2	1				44
22	19	8	1					28
	171	75	37	6	8	3	1	301

・不登校期間の長い生徒は開設年の平成17年に集中している。学校以外に行き場のなかった生徒にとって、イオが居場所として期待された表れである。

・不登校期間は、0～1年が最も多く、58、1%をしめる。1～2年が25%、2～3年が13%で、不登校が0～3年の生徒が94パーセントをしめている。

【入所学年とその後の継続期間】

入所の年度と学年、その後の入所継続年数を調べた。

平成17年

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	中卒	計
1年間					2	24	2	28
2年					16	2	1	19
3年	1			5		1		7
4年			2		1			3
5年								
6年				1				1
								58

平成18年

1年			2	1	2	16	5	26
2年					15	1	2	18
3年				3				3
4年			1					1
5年	1							1
								49

平成19年

1年					3	33	1	37
2年					12	1		13
3年				7				7
4年			3					3
								60

平成20年

1年		1	1	2	5	29	3	41
2年			1		12		1	14
3年			1	5	1			7
								62

平成21年

1年					5	20	4	29
2年				4	10	1		15
								44

小学生で入所した生徒は、継続期間が長い傾向にある。どの時期も中3での入所が多く、継続期間が1年で、高校進学によって不登校の改善を図り、学校復帰を目指している生徒が多い。

一方、中1、中2で入所する生徒の場合は、中3まで入所するケースがほとんどで、年度途中での学校復帰や学年が上がったことをきっかけに学校復帰できるケースは少ないが、イオに入所したことをきっかけに、もう一度学校に戻りたいと考えたり、転校によって環境を変え、

中1、中2であっても復帰して退所にいたったケースもあり、平成21年度利用者で平成22年に学校復帰につながった生徒が中1、中2で計6名、21年の年度途中で退所した中3生徒が4名、合計10名である。

今年度は、年度途中で復帰しイオを退所した生徒が、中3生1名、入所しているが毎日に学校登校している生徒が、中生2名である。中1、中2の生徒については、2月中旬から3月上旬に三者面談を実施し、新年度の登校を呼びかけた。

高校進学を機に環境を変えて再出発を図りたいと考えた場合、入試という最終的な目標はあるものの、中1、中2から入所した生徒が、どのように過ごすかという具体的な目標がないまま継続し、不登校期間が長引いてしまう傾向にあり、今後の課題である。

また、不登校期間が長い生徒が、中3の卒業間際や中卒状態になって入所を希望する場合がある。不登校状態が長く続き、入所はしているものの進学に結びつくことが難しい生徒について、卒業後の支援や「社会自立」に向けた支援はどうあればよいか、若者自立支援ネットワーク「サポートステーションあきた」、秋田県精神保健福祉センター等、各機関との連携・協力を進めていかなければならないと感じている。

4 今後の課題

今後の課題として次の点があげられる。

(1) ステップアップ・プログラムの充実

学習支援プログラムと集団支援プログラムの活用による不登校状況の改善に努めた。SB5 やスタディワーク等の集団学習に参加できる児童生徒の増加、中3生の多くが受験期で登校し、高校入学後の出席や成績面でも良好な状況等が確認されている。今後の課題としては、不登校期間が長期とならないよう、引きこもり傾向のある生徒への効果的な支援や学力不振の生徒への対応、中2以下のステップ4の段階に到達した生徒達への適切な登校刺激のあり方等を探っていききたい。

(2) 在籍校との連携強化

毎月の指導等の記録の交換、校長面談や担任等のイオ訪問、また担任等連絡協議会での話し合い等によって、在籍校とスペース・イオとの情報交換が図られた。これにより、不登校児童生徒への対応が進み、個々の生徒へのタイムリーな働きかけ、相談室の運営の充実、学習の評価等へと結実する在籍校も見られるようになった。

見学相談の際に在籍中学校からの紹介のケースが増え、その後の入所が速やかに進んだ。見学相談が、保護者、本人がスペース・イオ入所を視野にいれながらも現状を再考する機会につながるのではないかと思われる。対応は慎重に進めなければならないが、不登校の改善に向けて在籍校と連携を深めていききたい。

今後も、担任等連絡協議会等の充実、校内スペース・イオの設置に向けた支援、評価に関しての協力等も強めていききたい。

(3) 関係機関との連携

今後も小中学校の相談室、各地域の適応指導教室、ふきのとう秋田、教育センター、各医療機関、NPO「不登校を考える親の会あきた」等との協力関係を持ちながら、全体的な不登校・ひきこもり傾向の児童生徒への支援のネットワークを進めると共に不登校を長引かせないための支援や不登校歴が長い生徒への効果的な支援について、在籍校や若者の自立支援に向けた様々な関係機関との連携が必要である。

今年度から不登校の期間にかかわらず、見学相談に応じて具体的なアドバイスをを行った。現在の状態を把握し、どのような支援が望ましいのかを保護者と共に考えて、入所を踏みとどまったケースも多い。不登校の予防策となるよう、今後も入所していない児童生徒や学校等の相談機関としての役割も果たしていききたい。

おわりに

スペース・イオが開設されて6年が経過し、学習指導員、IT学習指導員、学習指導カウンセラー、計13名のスタッフで対応することができた。この6年間で301人の児童生徒が次のステップに向けて、巣立ちの場としてスペース・イオを活用し、「心の居場所」と「学習支援」を受け、一人一人が自分なりの目標に向かい一步一步進む姿が見られた。この6年間の取り組みを振り返り、スペース・イオの学習支援プログラムや集団適応支援プログラム、IT学習の取り組みなどの様々な取り組みが生徒の意欲や自尊感情を高め、自信を回復させる有効な支援であることが確認できたが、また、新たな課題も見えてきた。今後も学校・保護者・関係機関との情報交換や連携の強化に努め、不登校児童生徒への支援の更なる充実を図っていききたい。

平成22年度 行事実施記録

資料1

実施日	内 容	実施日	内 容
4/2	前期入所申請書の受け渡し(～4/14)	9/27	総合教育センター研修員による研修開始(～10/29)
4/2	在籍校への前期入所申請(～4/16)	9/10	校外学習 (プラザクリプトン・国際教養大学)
4/5	継続生徒のIT等学習体験開始	9/30	後期入所審査会・第2回運営協議会
4/12	継続生徒の通所体験学習開始	10/7	後期入所式、後期在籍校校長面談
5/13	前期入所審査会・第1回運営協議会	11/17	保護者会第2回役員会
5/17	大学院生による実習開始(～9/16)	12/10	二学期終業式
5/20	前期入所式及び保護者総会	12/11	イオクリスマス音楽会
5/27	一学期始業式	12/11	第2回保護者会
5月 中旬	前期入所生徒在籍校校長面談	1/14	三学期始業式
7/14	一学期終業式	2/13	三者面談開始(～3/4)
7/22	保護者面談(～8/3)	2/18	平成22年度スペース・イオ説明会
8/2	保護者会第1回役員会	3/4	保護者会会計監査
8/6	第1回保護者会	3/12	平成22年度修了式及び保護者総会
8/7	在籍校担任等連絡協議会		
8/20	二学期始業式		
8/23	後期入所申請書の受け渡し(～9/2)		
8/23	在籍校への後期入所申請(～9/9)		
8/28	第1回保護者会		

資料2

平成22年度 視察関係一覧

視察日	視 察 者 等	備 考
5/18	アルヴェ子ども未来センター職員	3名
8/3	能代養護学校	26名
8/6	韓国全羅南道教育委員会(県観光課・通訳)	4名(3名)
8/23	埼玉県議会議員教育委員	16名
9/24	自立支援サポートボランティア	1名
12/8	秋田大学大学院生・今野教授	3名
1/19	山形県朝日町教育委員会	6名
1/20	秋田県立栗田養護学校初任者研修	3名

回	月	日	プログラム	ねらい	参加人数	
1	6	3	自己紹介をしよう	・ソーシャルスキルとその必要性について学ぶ。 ・友達と初めて関わる時のスキルを学ぶ。	8名	
2	6	10	仲間に誘う・加わる		8名	
3	7	1	しっかり話を聴く	・コミュニケーションについて学び、円滑な人間関係を築くためのスキルを身につける。	3名	
4	7	8	じょうずに質問する		6名	
5	8	26	気持ちに共感する		4名	
6	9	16	あたたかい言葉をかける		8名	
7	10	28	はっきり伝える		5名	
8	11	11	きっぱり断る		6名	
9	11	25	やさしく頼む		6名	
10	12	9	きちんと謝る		6名	
11	1	27	気持ちをコントロールする		・自分の気持ちや問題について、自分でコントロールできるようになる。	7名
12	2	10	トラブル解決策を考える			6名
13	2	24	こころのイライラに気づく	5名		

構成的グループエンカウンター実施記録

回	月	ねらい	エクササイズの内容	参加人数
1	6	・人間関係づくり	ネームゲーム	6
2			X先生を知るYES・NOクイズ	
3	9	・自己理解・他者理解	ペンネームづくり	5
4			絵しりとり	
5			二人のハートはぴったりんこ	
6	10	・自己理解・他者理解・協力	無人島からのSOS	6
7			エゴグラム	
8	11	・自己理解・他者理解	私は私が好きです。なぜならば・・	4
9			ブラインドデート	
10	12	・自己理解・他者理解・協力の解放	私の価値観と職業	6
11			共同コラージュ	
11	2	・自己理解・他者理解・心身の解放	トランプの国の秘密	7
12			上手に断る	
12	3	・成長の自覚と感謝の気持ち	うわさ話って	7
13			みんなでリフレーミング	
13	3	・成長の自覚と感謝の気持ち	わたしのしたい5つのこと	6
14			ミュージックケア1	
14	3	・成長の自覚と感謝の気持ち	ミュージックケア2	7
15			考え方をチェンジ・別れの花束	

スタディワーク及びカルチャー&アドベンチャー実施記録

【スタディワーク】

実施日	内 容	参 加 生徒数
6月1日	【理】光の世界	8
6月8日	【理】顕微鏡の中の小さな生き物	5
6月15日	【社】千秋公園でスタディ	10
6月22日	【理】地球の大きさを測る	6
6月29日	【理】体の細胞をチェック	5
7月 6日	【社】市民市場でスタディ	8
7月13日	【理】音の世界	3
8月24日	【理】酸とアルカリ	3
8月31日	【社】NHK見学	4
9月 7日	【理】アルヴェでスタディ I	8
9月14日	【理】石の世界	7
9月21日	【理】月面基地の制作 I	6
9月28日	【社】勾玉をつくろう I	4
10月7日	【社】勾玉をつくろう II	9
10月12日	【理】月面基地の制作 II	8
10月26日	【理】携帯電話の分解	4
11月2日	【理】アルヴェでスタディ II	6
11月9日	【社】DVD視聴 I	6
11月16日	【理】DNAの析出	8
11月30日	【理】電球を作る	6
12月7日	【社】DVD視聴 II	7
1月18日	【理】電流と磁界の関係	9
1月25日	【理】モーターの仕組み	8
2月8日	【社】クイズでスタディ I (歴史)	7
2月15日	【理】ゴミの減量・分別	9
2月22日	【理】地球外生物を探せ	5
3月1日	【社】クイズでスタディ II (地理)	8

【カルチャー&アドベンチャー】

実施日	内 容	参 加 生徒数
5月28日	芸術散歩1 千秋美術館見学	6
6月 4日	パソコンに挑戦1 (通信制教員)	7
6月11日	*調理1 (クッキー作り)	10
6月14日	スポーツ1	9
6月25日	読み聞かせ (本校司書)	8
7月 2日	ようこそ先輩 (イオの元通所生2名)	5
7月 9日	夏のお茶会 (定時制教員)	8
8月23日	スポーツ2	6
9月 3日	9/10の校外学習に向けて	4
9月17日	調理2 (マシュマロを使って)	5
9月24日	パソコンに挑戦2 (通信制教員)	8
9月27日	スポーツ3 (イオスポーツフェスタ)	8
10月 1日	ねぶり流し館へ行こう	5
10月 8日	芸術散歩2 (県立美術館・千秋公園)	9
10月15日	*パステルアート	7
10月25日	スポーツ4	6
11月 5日	パソコンに挑戦3 (通信制教員)	6
11月12日	ロシアのおやつを作ろう (国際交流協会)	6
11月19日	スポーツ5 (ボウリングへ行こう)	8
11月26日	*クリスマス音楽会にむけて	13
12月 3日	*クリスマス音楽会にむけて	14
12月10日	*クリスマス音楽会にむけて	16
1月17日	スポーツ6	12
1月28日	冬のお茶会 (定時制教員)	8
2月 4日	*調理4 (チョコレートクッキー)	10
2月21日	スポーツ7	13
3月 4日	修了式に向けて	16
3月10日	修了式に向けて	8
3月11日	修了式に向けて	14

*はNPO法人「不登校を考える親の会あきた」の担当による活動である。

各校の不登校対応(相談室・評価等)についてのアンケート集計 提出22校/在籍校22校
2010.8.06現在

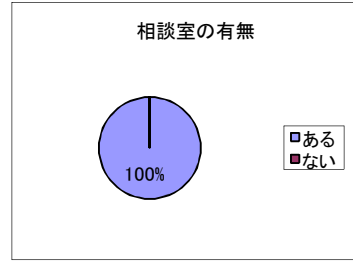
1 相談室等の運営に関して

(1)相談室の有無

ある	ない
22	0

相談室の名称

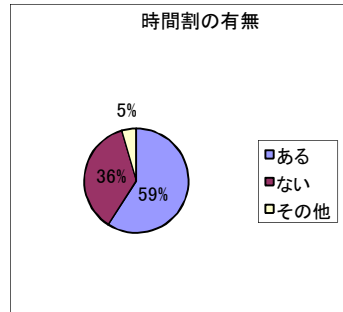
第1相談室	さわやか
相談室 8	ふれあい教室
八卦ルーム	せせらぎ
心の相談室	みどりの部屋
交流ルーム	やすらぎ 2
談話室	すくすく
ひまわり たんぽぽ	ふれあいスペース



(2)時間割の有無

ある	ない	その他
13	8	1

その他の内容
必要に応じて



○時間割の例

談話室担当時間割 <II期>

	月	火	水	木	金
1	川原谷	石塚	川原谷	川原谷	川原谷
2	井川	岩見	赤田	川原谷	福垣
3	川原谷	小野	近藤	菊地	築地
4	星澤	佐藤ゆ	川原谷	川原谷	川原谷
5	川原谷	熊谷	川原谷	川原谷	赤川
6	(川原谷)	川原谷	(川原谷)	豊嶋	伊藤奈

時間割 2-6

	月	火	水	木	金
1	ふれあ 平塚勝	ふれあ 平塚勝	ふれあ 田口千	ふれあ 菅原智	ふれあ 田口千
2	ふれあ 小玉治	ふれあ 田口千	ふれあ 小澤浩	ふれあ 田口千	ふれあ 和田正
3	ふれあ 菅原智	ふれあ 鏡孝志	ふれあ 菅原智	ふれあ 和田正	ふれあ 平塚勝
4	ふれあ 和田正	ふれあ 菅原智	ふれあ 田口千	ふれあ 平塚勝	ふれあ 菅原智
5	ふれあ 加賀谷	ふれあ 和田正	学活 担任	ふれあ 菅原智	ふれあ 渡部基
6		ふれあ 菅原智		ふれあ 田口千	ふれあ 大野恵

やすらぎ(A) 時間割

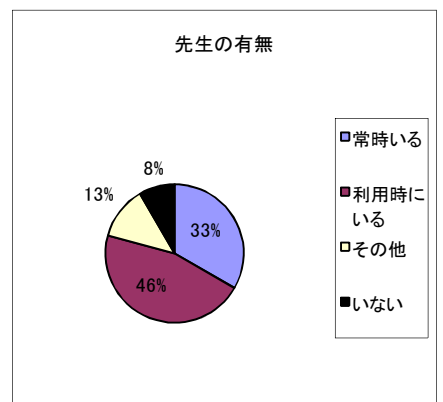
	月	火	水	木	金
1	数学 (藤木先生)	国語 (藤田)	国語 (藤田)	道徳 (藤田)	保健 (伊藤先生)
2	学活 (藤田)	理科 (小島)	数学 (佐藤先生)	国語 (藤田)	加藤 (伊藤先生)
3	美術 (関井先生)	保健 (伊藤先生)	音楽 (山口先生)	数学 (藤木先生)	数学 (北*木先生)
4	国語 (藤田)	国語 (藤田)	保健 (阿部先生)	社会 (中村君)	保健 (藤谷先生)
5	社会 (中村公)	道徳 (藤田)	総合 (藤田)	学活 (藤田)	国語 (藤田)
6	学活 (藤田)	英語 (伊藤)	総合 (藤田)	学活 (藤田)	学活 (藤田)

(3)先生の有無

常時いる	利用時にいる	その他	いない
8	11	3	2

複数回答

その他の内容
時間割で組んであるが、必要に応じて対応している
常時いることは不可能なので、授業のない時間をみて可能な限りいる
監督時間割。相談室に常駐しているわけではない
水曜日 13:00~17:00
いないの内容
現在利用者がいない
昨年度は登校時は学年で対応し、その後教科担当、教頭、生徒指導主事、養護教諭がついて勉強をみた。その間、保護者面談を勧めることもあった

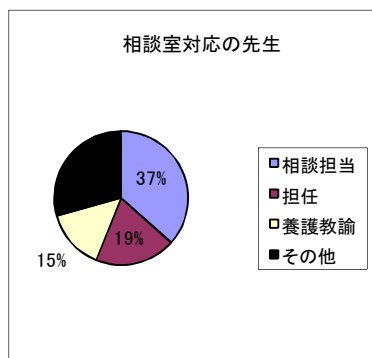


(4)相談室対応の先生

相談担当	担任	養護教諭	その他
15	8	6	12

複数回答

その他の内容	
学年部	学年主任
生徒指導主事	生徒支援担当
教務	教頭 4年部
全職員2	
スクールカウンセラー	
空き時間の教員	



(5)工夫及び困難点

○工夫していること

環境や教材等	<ul style="list-style-type: none"> ・話しやすい場所・時間・相手などの環境づくり。 ・保護者も相談できる場所への配慮。 ・保健室で過ごしたい生徒、人と会うことを嫌い相談室で過ごしたい生徒がいるので、関係職員で協議し生徒が自分の居場所を選択できるよう配慮している。 ・環境美化(植物、絵)。掲示環境(詩、お守り、格言など励ます内容)。図書(メッセージ系の本、参考書) ・保健室をふくめ4つの部屋があるので、学習しやすい部屋を生徒に選択させている。 ・部屋の中に、さらに小さな部屋がある。投げられる「物」を置いていない(アスペルガー等の生徒が興奮した際、落ち着けるように)。
交流・ふれあい	<ul style="list-style-type: none"> ・給食時は多くの職員とふれあうことができるように、同じ職員が毎日つくことがないように配慮している。 ・生徒が来校したときは必ず先生がいるようにしている。
学習への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・個人ファイルをもたせて、目標と計画を立てさせながら担当者がコメントを添えて励ましている。 ・時間割を組んでいる。 ・毎時間先生がつけるように「担当時間割」を作成している。 ・できる限り、学習が進められるようにしている。 ・教科担任の授業ができるようにしている。 ・個々に一日のスケジュールを確認し、計画性をもった学習・生活を目指している。 ・時間割が組まれており、各時間に担当者がいるので、生徒がいつ登校しても対応できる。そのため教科指導ができる。 ・時間割に明確に教科担任を配置し、評価することを前提にした教科指導をしている。 ・空き時間の教師が対応できるように時間割を工夫している。 ・監督時間割の作成(年3回)。 ・授業の空き時間を利用して必ず一人先生がつけるようになっている。朝、その日の時間割を書いて、授業に参加できない時間の学習を話し合っ決めていく。 ・3年生が在籍しているので、進学のために5教科の授業時間確保に配慮している。 ・職員全体で時間を分担している。 ・時間割の中に1時間ごとの担当者を明記して、全職員で対応に当たっている。
連携・対応等	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に相談室からの通信という形で関係の先生に様子を知らせている。 ・どのような学習をしたのか他の先生がわかるように「談話室ノート」を活用している。 ・カウンセラーの方には家庭訪問をしていただき対応の選択肢をもちやすい。 ・専門機関との連携。

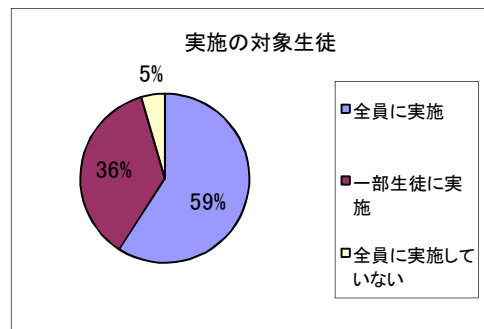
○困難を感じていること

職員数等	<ul style="list-style-type: none"> ・先生方への負担。 ・時間割作成時に先生方に難儀をかけていると思う。 ・監督の先生方の空き時間の少なさ。 ・生徒支援が加配されているわけではないので、相談室で過ごしたい生徒への対応が養護教諭中心になってしまう。
生徒の状況等	<ul style="list-style-type: none"> ・個々のスケジュールに合わせた教科等の支援ができないことがある。 ・生徒の学習内容(進度に合わせる場合、進度に関係なく生徒が自分で決めて取り組む場合)の判断等 ・いろいろな工夫をしているが教室復帰に至っていない生徒がいること。 ・学校へ来ていない生徒への支援が難しい。 ・同じ先生から5教科教授される生徒の気持ち。 ・時間割を作って対応する人を決めていくが、欠席したり時間割通りに学習しなかったりする点。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が学習している教科によっては担当者が必ずしも教えることはできないため評価も難しい。 ・定期テストを受けるために3学年の複数生徒が利用しようとするので、物理的に無理が生じてしまうこと(不登校以外の単発利用もあるため)。 ・周囲の目に触れない相談室の場所の確保。

2 不登校生徒の評価に関して

(1)実施の対象生徒

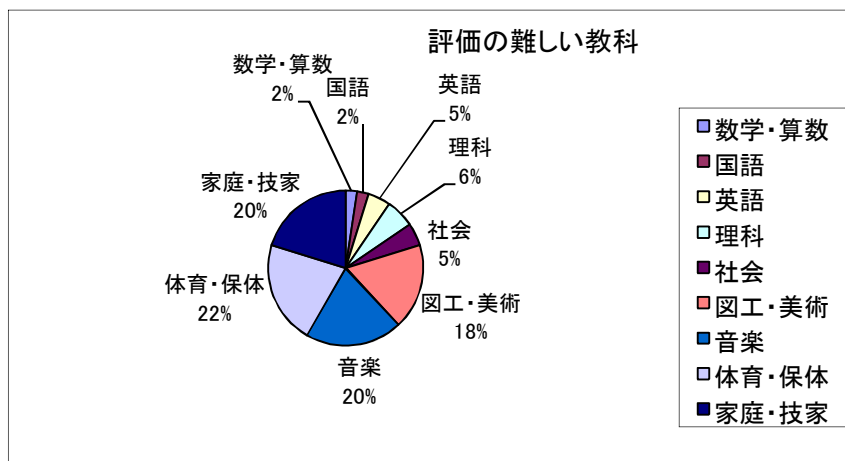
全員に実施	一部生徒に実施	全員に実施していない
13	8	1



(2)評価の難しい教科

数学・算数	2
国語	2
英語	4
理科	5
社会	4
図工・美術	15
音楽	17
体育・保体	18
家庭・技家	17

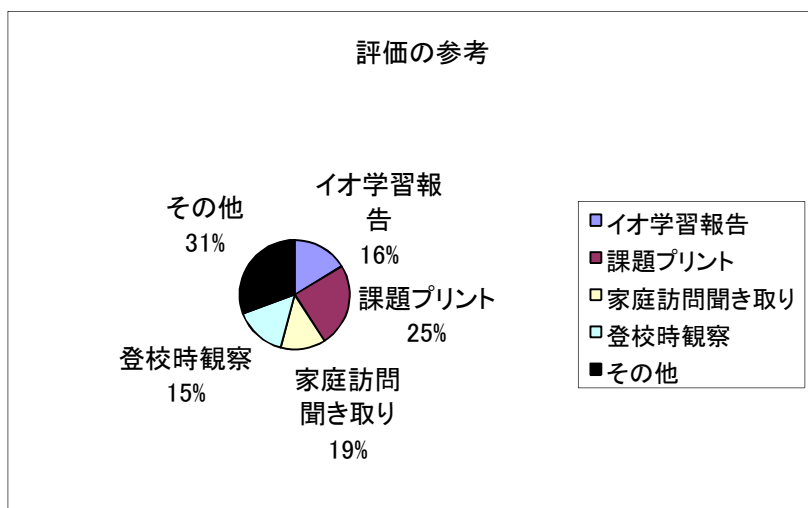
複数回答



(3)評価の参考

イオ学習報告	課題プリント	家庭訪問聞き取り	登校時観察	その他
16	24	13	15	30

複数回答



その他

- ・定期テストの結果
- ・授業への参加
- ・出席状況

(4)工夫及び困難点

○工夫していること

課題の提出等

- ・できるだけテストの結果やプリント,作品等で評価するようにしている。
- ・課題を与えたりレポートの提出をさせたりと教科担当で工夫している。
- ・技能教科でも作品やレポートの提出をする機会を増やす。
- ・できるだけ評価に関する情報を集めること。
- ・美術の課題などを渡し,授業に出席できなくても作品を完成させると評価に入れてもらっている。
- ・各教科から個々に評価へ活用できる課題を提示し,取り組み状況を確認している。
- ・期限を決めてワーク,レポート,学習ノート(自分が決めて取り組んだもの)などを提出する。
- ・生徒の実態に応じたプリントを準備する。
- ・課題(提出物等)を与えて評価の場面を作ること。
- ・学級担任による家庭訪問で,学習資料を配付したり回収したりしている。

定期テスト受験

- ・家庭との連絡をとり,できるだけテストを受けることができるように配慮している。

評価

- ・観点だけでも評価するように努力している。
- ・授業に出ていなくても家での様子などを訪問した先生から聞いて,各教科担当が評価の参考にしている。
- ・教科ごとの評価基準を参考にしながらも,担当者と相談して評価を行っている。
- ・教科の先生と面談する。
- ・進路指導をあわせた評価・通知表などについて保護者に説明する。
- ・家庭やイオでの学習状況や生徒の興味関心などの情報を集め,全員に全教科評価している。また極力教師の働きかけを行うようにしている。

○困難を感じていること

技能教科の評価

- ・実技教科の評価が難しい。
- ・音楽や体育などの評価へ活用できそうな課題の設定が難しい。
- ・基礎教科についてはテストによってある程度の評価ができるが,技能教科については,授業参加がなく,作品もなければ評価はできない。
- ・技能教科の評価はむずかしい。
- ・実技が見られない。制作過程が見られない。評価材料,資料が少ない。
- ・評価する資料の不足。評価のデータが少ない。

評価材料不足

- ・全員評価する方向であるが,全く登校できていない生徒に対しては評価が難しい状況である。
- ・全く無反応で保護者が非協力的な生徒。
- ・保護者までは接見できるが,本人との接見がむずかしい場合の評価。
- ・評価に関わる情報が得られない場合。
- ・授業にも出席しない,提出物,作品も出さないと評定不能になってしまうことがある。
- ・評価対象の作品などが見つからないこと。情報が少ないこと。
- ・授業に出ていない教科の評価は難しい。
- ・プリントなどへの取り組みができない生徒への評価。
- ・提出物等で評価できない教科をどのように評価するのか。

評価規準・評価の意義等

- ・毎時間授業に出席している生徒に比べて,評価材料が少ないため,どこまで評価できるか教師間でも見解が分かれるときがある。
- ・絶対評価なので,当該生徒にはハードルが高い評価項目がほとんどである。従って本人はがんばっていても〇評価をつけざるを得ないことが多々ある。
- ・授業内容とあわせた評価をしていなく基準に明確さを持ってないので大変である。
- ・不登校生徒の状況が一人一人異なるため,どのような評価方法で評価したらよいのかわからなというのが正直なところである。

その他

- ・学校に来る生徒はよいが,来られない生徒への指導の大変さ。
- ・課題を出すことで負担を与えることにならないか。
- ・課題を出すだけならば容易であるが,アフターケアができない場合がある。会えないとか途中でやめてしまおうとか。未完なことが増えることによってさらに自信をなくしてしまうのではないかと危惧してしまう。

各校の不登校対応のアンケート集計から見えてきたこと

1 相談室等の運営に関して

- (1)在籍校22校のすべてが相談室を設置している。
- (2)相談室に時間割を設定しているのは約60%の13校で、一昨年のアンケート実施時より3倍に増えている。
- (3)常時と利用時,可能な限りいる,を合わせると92%の学校に相談室対応の先生がいる。
- (4)相談室の対応は相談担当,担任,養護教諭など複数の先生が関わっている。
- (5)各校の工夫
 - ①相談室の環境への配慮(落ち着けるスペースの確保・学習スペースの設置・学習プリント等の準備)
 - ②いろいろな先生たちと交流する機会をもつ
 - ③学習に取り組めるような工夫(時間割の設定・学習計画の立案・教科担任による指導・学習の記録)
 - ④連携・対応の工夫(通信やたよりの発行,専門機関との連携,職員間での情報交換
家庭訪問～スクールカウンセラー,担任,学年主任等)
- (6)各校から寄せられた困難点
 - ①職員数の不足等により,不登校児童生徒に十分な対応ができない。
 - ②生徒の登校,学年・能力・意欲の違いが大きく,きめ細かな対応が難しい。 など

2 不登校児童生徒の評価に関して

- (1)全員及び一部生徒への実施を合わせると95%(21校)の学校が評価を実施している。
- (2)技能教科の評価が難しい学校が多い。保健体育18校,音楽17校,技術家庭17校,美術15校である。
- (3)評価の参考としては,在籍校の課題提出25%,イオの学習報告16%,家庭訪問での聞き取り19%,
登校時観察15%の順となっている。
- (4)各校の工夫
 - ①課題等の工夫(レポート,不登校でも可能なもの)
 - ②定期テストを活用し,受ける場所や時間などにも工夫が見られる。
 - ③相談室の活用(自学自習の様子,教科担任による指導,面談等)
 - ④技能教科に関しては,作品やレポートを提出する機会を増やす。
 - ⑤その他(子どもへの励まし,家庭訪問での観察,職員間の情報交換による多面的な評価等)
- (5)各校から寄せられた困難点
 - ①技能教科の評価が「困難」である。
 - ②どの教科も評価の材料が少ない。
 - ③評価規準に基づく評価が困難である(絶対評価等)。

資料7

アンケートから見たスペースイオ

実施期間 平成22年12月22日～平成23年1月13日

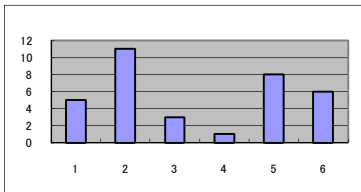
送付数	回収	回収率
生徒56	34	61%
保護者56	37	66%

(1) 児童生徒のアンケート結果

不登校のきっかけと理由

Q1 不登校のきっかけと思われることは何ですか？(最も当てはまるものを一つ)

選択項目		
1 いじめられたこと	5	15%
2 友人関係がうまくいかなかったこと	11	32%
3 勉強がわからなくなったこと	3	9%
4 病気で休んだこと	1	3%
5 よくわからない	8	23%
6 その他	6	18%
合計	34	100%

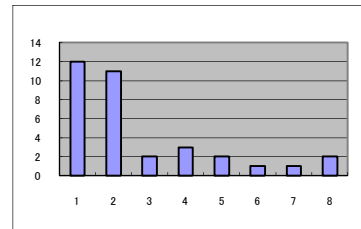


その他の内容

- ・部活 ・行きたくない
- ・体調がよくない
- ・すべてが少しずつずれていった

Q2 学校に行けなかった主な理由は何ですか？(最も当てはまるものを一つ)

1 学校の雰囲気がいやだ	12	35%
2 クラスの生徒がどう思っているか気になる	11	32%
3 勉強についていけるか不安だ	2	6%
4 特定の生徒との折り合いが悪い	3	9%
5 学校の先生との折り合いが悪い	2	6%
6 家にいる方が楽しい	1	3%
7 病気のため	1	3%
8 その他	2	6%
合計	34	100%



その他の内容

- ・部活
- ・わからない

【今年度の結果】

・「不登校のきっかけ」が「友人関係」である生徒が32%で、昨年度より8ポイント高い。「病気で休んだこと」が3%で、昨年度比で15ポイント減っている。「よくわからない」が昨年度より12ポイント高い。
 ・「学校に行けなかった理由」に、ついて「どう思われているか気になる」をあげた生徒が、昨年度より、10ポイント高くなった。

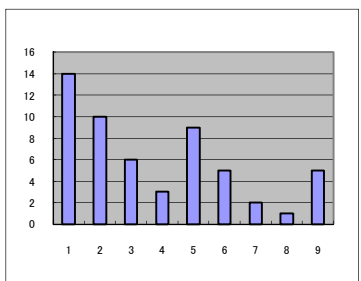
【今後の課題】

・今年度の傾向として、同年齢程度の集団や関わりを苦手と感じ、周りにどう思われているのかを気にする生徒が多いことがうかがえる。本人の特性や状況を周囲が理解した上で、早期に対応をすることが必要と思われる。

スペース・イオの学習支援等について

Q3 スペース・イオを利用してよかったことは何ですか？(複数回答可)

1 勉強の遅れを取り戻すことができた	14	25%
2 友人ができた	10	18%
3 いろいろな体験ができた	6	11%
4 自分に自信がもてるようになった	3	5%
5 進路について考えられるようになった	9	16%
6 先生との交流ができた	5	9%
7 学校に復帰する気持ちが生まれた	2	4%
8 家の中での会話が増えた	1	2%
9 その他	5	9%
合計	55	100%



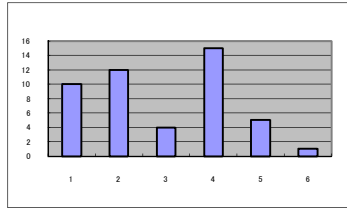
その他の内容

- ・勉強をするようになった
- ・友人ができた
- ・話す人ができた

学校復帰について

Q4 学校に復帰する際、心配なことは何ですか？（複数回答可）

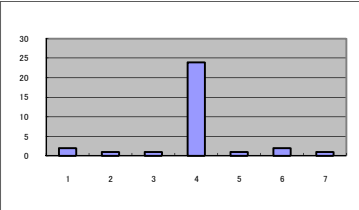
1友人関係がうまくいか	10	21%
2勉強について行けるか	12	25%
3先生がどう対応してくれるか	4	9%
4学校のリズムについていけるか	15	32%
5特別な目で見られないか	5	11%
6その他	1	2%
合計	47	100%



その他の内容
・すべてが心配

Q5 学校復帰についてどのように考えていますか

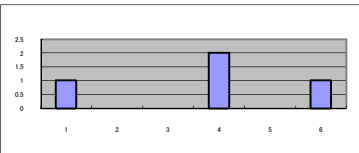
1学校の教室で授業を受けるつもりである	2	6%
2はじめは保健室・別室登校などから始めたい	1	3%
3イオに通いながら学校復帰をめざしたい	1	3%
4今は無理だがいずれ学校復帰するつもりだ	24	75%
5学校復帰はまだ考えられない	1	3%
6学校に復帰するつもりはない	2	6%
7その他	1	3%
合計	32	100%



その他の内容
・わからない

Q6 Q6で「5」「6」と答えた人は、理由を選んでください。（複数回答可）

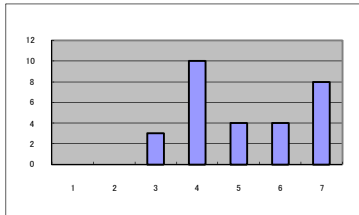
1友人関係がうまくいかないだろう	1	25%
2勉強に自信がない	0	0%
3学級の雰囲気がいやだ	0	0%
4学校のペースにはついていけないだろう	2	50%
5いじめられそうで怖い	0	0%
6その他	1	25%
合計	4	100%



その他の内容
・イオで満足

Q7 学校に対する要望は何ですか。

1家庭訪問を増やしてほしい	0	0%
2勉強を教えてほしい	0	0%
3登校を誘いかけてほしい	3	10%
4学校の情報をこまめに教えてほしい	10	34%
5学校にもイオのような場所を作ってほしい	4	14%
6しばらくそっとしておいてほしい	4	14%
7その他	8	28%
合計	29	100%



その他の内容
・放っておいてほしい
・特になし

【今年度の結果】

- ・Q4: 復帰する際、心配なことについては、昨年度とほぼ同率の結果である。
- ・Q5: 75%が学校復帰の意志を示している。昨年度比で20ポイント高い。そのうち、高校進学を機に新しい環境で復帰したいと考えている生徒が88%をしめる。復帰するつもりはないと答えた生徒が昨年度比で6ポイント増えた。
- ・Q6: 学校に復帰するつもりはないなどの理由としては、「学校のペース」をあげた生徒が50%である。昨年度から増加の傾向を見せていた。一方、毎回3割近くの生徒があげていた「勉強に自信がない」が0%であった。
- ・「そっとしておいてほしい」生徒が14%で昨年度より27ポイント低いが、「その他」が昨年度よりも高く、「放っておいてほしい」「特になし」がしめる。

【今後の課題】

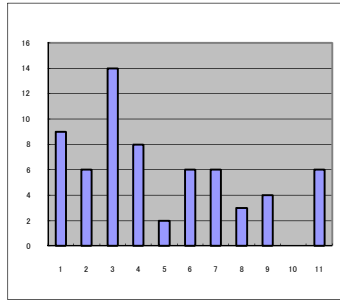
- ・学校復帰を希望している生徒が増えていることから、本人の意欲を高めながら、在籍校との連携を進める必要がある。
- ・登校できない生徒であっても学校のことを気にかけて、情報を得たいと思っている。根強い情報提供などで、生徒との関係を保ち続けることが信頼関係を育て、登校の意欲や改善に結びついて行くと思われる。

(2) 保護者のアンケート結果

子どもの変容

Q1スペース・イオに入所してから子どもさんの変化はありましたか？当てはまるものを選んでください。(複数回答可)

1生活習慣が改善された	9	14%
2家族との会話が多了くなった	6	9%
3表情が明るくなった	14	22%
4友人の話をするようになった	8	13%
5学校のことを話題にするようになった	2	3%
6外出することが多了くなった	6	9%
7家族以外の人とも会うようになった	6	9%
8学校の先生と会う時間が多了くなった	3	5%
9あまり変化はない	4	6%
10マイナスの変化の方が多い	0	0%
11その他	6	9%
合計	64	100%



その他の内容

- ・勉強時間を自分で決めた
- ・意欲が出てきた
- ・友人の行き来ができた
- ・進路のことでぼんやりしている
- ・自分で決めることが増えた
- ・勉強をするようになった

【今年度の結果】

- ・昨年度と同様の傾向を示し、約94%の保護者は改善したと答えている。その他の記載もプラス面での変化がほとんどであった。
- ・「あまり変化はない」と答えた場合はIT学習を継続して行っている等の現状維持の状態や、入所して間もない生徒の保護者が多い。

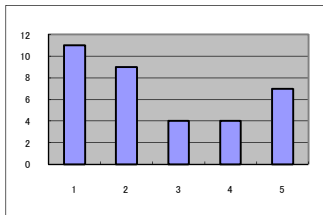
【今後の課題】

- ・IT学習を安定して行うことができている生徒について、次へのステップアップを図るために、通所の働きかけの工夫と強化が課題である。

学校とのかかわり

Q2現在の学校とのつながりはどうですか？あてはまるものを選んでください。(複数回答可)

1週1回程度家庭訪問がある	11	31%
2月に1～2回程度家庭訪問がある	9	26%
3家庭訪問はないが電話等での連絡がある	4	11%
4家庭訪問や連絡はほとんどない	4	11%
5その他	7	21%
合計	35	100%

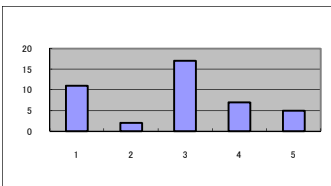


その他の内容

- ・受験準備
- ・学校で面談
- ・保護者学校訪問
- ・週1電話
- ・中卒のため、なし
- ・メールやFAX
- ・定期的に登校

Q3学校からの誘いかけはありますか？

1行事やテストなどへの誘いかけがある	11	26%
2保健室や相談室への登校の誘いかけがある	2	5%
3三者面談や進路相談などへの誘いかけがある	17	40%
4学校からの誘いかけはほとんどない	7	17%
5その他	5	12%
合計	42	100%



その他の内容

- ・家庭訪問時、勉強を教える
- ・封筒にメッセージ
- ・母と面談
- ・教科の個別指導

【今年度の結果】

- ・「連絡がほとんどない」11%である。「その他」も含めるとほぼ90%の児童生徒に、学校側が何らかの誘いかけを行い、保護者も在籍校とのつながりを意識し、受け止めている。

- ・「その他の内容」から、「誘いかけがほとんどない」場合は、本人が拒絶や中卒者であった。

【今後の課題】

- ・在籍校では、校内での支援体制がしっかりと機能し、担任だけでなく教科担任や相談担当、生徒指導、スクールカウンセラーなど様々な立場からの支援が工夫されている。特に、教科担任の個別指導は評価にもつながり、生徒・保護者の励みにもなっていると思われる。

- ・中卒者の場合は、中学校卒業と同時に日常的な支援がなくなってしまう。中学校卒業後の目標や方向性について、在籍校、本人、保護者で相談や確認することが重要であろう。さらに進路決定・実現のためには、保護者側から在籍校に積極的にかかわり、相談や情報提供を求めていく必要があると思われる。